大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

＊特集 出版と知の未来

互 盛央　1
書物はどこから来て、どこに向かうのか

長谷川一　8
ポスト・ヒューマンの時代における人文学・人文書

橘 宗吾　15
学術書を出版する意味 ――情報化のなかの知識・流通・読者

増山 修　23
学術書は「どこでもドア」だ！

大学出版部ニュース　28

No. 118
2019.4
春

一般社団法人
大学出版部協会

大学出版部協会　新刊ご案内

ブックレット第4弾

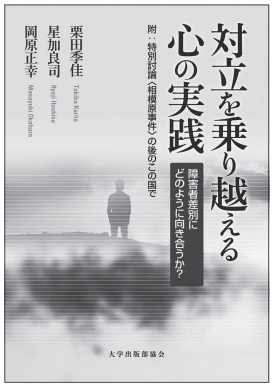
対立を乗り越える心の実践

障害者差別にどのように向き合うか？

栗田季佳・星加良司・岡原正幸

大勢の障害者の命が奪われた〈相模原事件〉を起こす影は，私たちの内にある．制度や「ねばならない」的教導では，差別はなくならない．「潜在化する偏見」を炙りだし，その原因となる心のメカニズムと社会的背景にまで遡って考察することで，差別解消への糸口を考える．

［発行：大学出版部協会／発売：東京大学出版会］



ISBN978-4-13-003153-0　2017年2月刊行
A5判／88頁／本体1,000円＋税

主要目次

第１章　見えない偏見
障害者を取り巻く問題に現れる心の動き　（栗田季佳）

第２章　バリアフリーという挑戦
「社会を変える」ことは可能か　（星加良司）

第３章　生の問題として〈対立を乗り越える〉を考える　（岡原正幸）

第４章　討論
対立を乗り越える学問の挑戦　（栗田季佳・星加良司・岡原正幸）

第５章　特別討論〈相模原事件〉の後のこの国で
有事モード下の差別と偏見

特集＊出版と知の未来

書物はどこから来て、どこに向かうのか

互　盛央（講談社）

いつもそばには本があった。

いきなり手前味噌で恐縮だが、新しい自著の話から始めたい。

去る三月一一日、國分功一郎さんとの共著『いつもそばには本があった。』（講談社選書メチエ）が刊行された。表題からご想像いただけるとおり、「本」についての本である。しかし、これまで何冊も出されてきたような読書論や書物論ではないし、ガイドブックやオススメ本を紹介するものでもない。そして、共著といっても「対談」ではなく、かといって「往復書簡」でもない。

では、どんな本かといえば、二人の著者の一方が思いつくままに何冊かの本を取り上げ、それをめぐる記憶や考えを綴りながら連想される他の本に話題を展開し、一篇の完結したエッセイを書く。もう一方は、その文章を読んだあとで連想される本を挙げ、それをめぐる記憶や考えを綴って、やはり完結した文章にする。そして一方は……というように、話がどのように展開し、どこに向かっていくのかも分からないまま、交互に書き継いでいった一六篇を一冊の書物の形に仕立てたものである。

実際に始めてみてすぐに気づいたが、これは想像より苦しい作業である。相手が何を書いてくるのか、どんな本を挙げてくるのか、予想もつかない状態で待つことに耐え、実際に相手が挙げた本や話題から出発するという制約の中で一篇の文章を書く……それを何度も繰り返していくのは、大げさに言えば自分の全存在を試されているような気さえしてくる経験だった。

では、なぜそんな苦しい思いをしてまで、この本を作ったのか、と思われるかたもいるだろう。

ここで少し種明かしをすると、ヒントを得たのはもうず

いぶん前のことで、クラシック音楽についての本からだった。宇野功芳・中野雄・福島章恭による『クラシックＣＤの名盤』（文春新書）がそれで、一九九九年の本である。有名曲を中心に選ばれたさまざまな作曲家の作品について、三人の著者がみずから「名盤」と考えるＣＤを挙げ、その理由を記すという形式のものだが、初めて手にして目から鱗が落ちたのは、各曲にメインの著者が置かれ、他の二人はメインの文章を読んだあとで自分のところを執筆するルールになっていることだった。

自分が挙げようと思っていた盤をメインの著者が選んでいるのを知って、あえて違うＣＤを挙げたり、あるいはメインの著者の選盤に異論を唱え、その理由とともに自分の挙げる演奏が優れていることの説明に結びつけたりする場面がたびたび現れる。そうすると、かなり異なる経歴をもち、嗜好もずいぶん違っている三人の文章のあいだに、いくらか緊張感を帯びた連なりが生まれ、その狭間から、明確には言葉にできない共通感覚のようなものが立ち上がってくるのが感じられるのだ。

これは単にさまざまな「名盤」を紹介するのとはまったく異なる印象を私に与えた。

音楽については昔から「名盤ガイド」の類いが多く作られていて、クラシックも例外ではない。最近の例を見ると、『最新版 名曲名盤５００』（音楽之友社（ONTOMO MOOK）、二〇一七年五月）が出た翌年には早くも『最新版 クラシック不滅の名盤１０００』（同、二〇一八年一一月）が出され、「クラオタ」である私は「何度も似たようなものを出しやがって……」などと内心で毒づきつつも、しっかり購入してしまう。私のような人が一定数（以上？）いるのだろうから、出版社としては出さない手はない（私が音楽系出版社に所属していたら、間違いなくそうする）。これらのムックは、何十人にも及ぶ評論家たちが持ち点形式で投票し、「名盤」に順位をつけるものである。投票の結果、第一位を獲得したＣＤは、客観的に決められた「至高の名盤」ということになるのだろう。

このような「ランキング本」とでも呼べるものは、趣旨が明快すぎるほど明快であるだけに、ガイドとしては便利だろうし、ニーズがあることも分かる（何しろ、私自身が何度となく購入しているのだ）。そして、同様の趣旨で作られた「ロックの名盤」や「ジャズの名盤」といった書籍はいくらでもあるし、映画はもちろん、最近は落語家についても順位がつけられたりしている。

ここで私も少なからず関わってきた人文書を中心とする書籍の世界に目を向けると、昔から年末に「今年の三冊」といった記事が新聞や雑誌に載ったりしていたが、近年では読者からの投票で順位をつけ、第一位を獲得した本を表彰するような企画も目にするようになった。つまり、客観的に「至高の名著」を決めようということだろう。これはミステリをはじめとする小説を対象にして行われていた企

画を人文書に応用したものだと言える。人間はよくよくランキングというものが好きなのだろう。

「経験」としての書物

だが、ランキングには見逃せない欠落があることを、私は『クラシックCDの名盤』を読むまで、はっきり自覚できていなかった。ランキングに選ばれた本は相互の連なりがない状態で並べられる。それらをつなぐものがあるとすれば、「順位」という名の数字の順序だけである。そして、この新書から着想を得たと思われる、許光俊・鈴木淳史による『クラシックCD名盤バトル』（洋泉社（新書y）、二〇〇二年）を手にするに至って、私はランキングというものが暗黙の前提にしている価値があることに気づいた。

この本は、おおむね同じ趣旨で書かれている。しかし、そこで挙げられているCDの多くは『クラシックCDの名盤』にも、先ほど挙げたムック本にも登場しない。それどころか、ランキング本の常連になっている「名盤」を一蹴してみせ、斯界の主流ではおよそ「名盤」とは程遠いと思われているようなCDが激賞されたりしている。そうした評価の一つ一つに賛成するかどうかは、ここでは重要ではない。気づいてしまえば、まったく当たり前のことだが、この本が暗に伝えているのは、ランキングというのは「順位の高いものほど優れている」ことを前提にしている、という事実でもあることに私は気づいた。

この前提を推し進めれば、こんな発想になるだろう――「名盤」や「名著」は買って損しないが、それ以外のものは買うと損をする危険性がある、と。ここにあるのは「損／得」という価値である。だが、これは人文書と呼ばれる書物とはかけ離れた価値ではないのか、という思いを私は禁じえなくなった。そうして私は人文書を題材にして『クラシックCDの名盤』や『クラシックCD名盤バトル』のような本を作れないだろうか、と考えるようになっていったのだ（まさか自分がその著者の一人になるとは思っていなかったが）。

マニアのあいだでは有名な、ヘルマン・アーベントロート指揮バイエルン国立管弦楽団によるブラームス交響曲第一番のCD（一九五六年一月一六日録音）がある。まさにやりたい放題としか言いようのない「トンデモ演奏」と呼ぶべき「迷盤」で、私はこの演奏に触れて、それまで抱いてきたこの曲のイメージを粉々に砕かれたのをよく覚えている。そして、ここが重要なところだが、それ以降、私がもつこの曲のイメージは、この録音なしには成り立たないものになった。つまり、「得」を求めて「名盤」だけを購入していたら決してもてなかったこの曲のイメージをもつようになったのだ。

言うまでもなく、そうして形作られた曲のイメージは、私の中にあるものだし、私だけがもっているものである。それまでにどんな演奏を聴いてきたのか、それらをいつ、

どんな精神状態で聴いたのか、といったことは人によってすべて異なるのだから、同じ曲でもそのイメージが千差万別であることは言うまでもない。だとすれば、万人にとって共通の同じ曲などというものは存在していないのではないか。そこには客観的に「正しい」演奏などありうるはずはなく、したがって客観的に決められた「名盤」などもありうるはずがない。

そのことに気づいたとき、私の中には確かに記憶のネットワークがあり、ブラームスの交響曲第一番というのはそのネットワークの狭間から浮かび上がってくるものだと思った。そして、現に私自身がこのCDをきっかけにしてアーベントロートに入れ込み、他の録音を探し求める日々を送ったという事実が示しているとおり、そのネットワークは幹から枝葉が伸びるように生長し、思いもかけない連なりをもたらしたりしながら、徐々に豊かになっていく。

私が手にした『クラシックCDの名盤』や『クラシックCD名盤バトル』は、異なる経歴をもち、嗜好も異なれば音楽体験も異なる複数の著者が同じ曲をめぐってそれぞれの記憶のネットワークを交錯させるさまを記録したものだが、その交錯は著者たちのあいだだけで起きているわけではなかった。読者である私自身もまた、そうやってみずからの記憶のネットワークを交錯させていたのだ。

だとすれば、音楽とは、そして書物とは、そのような交錯の「経験」そのものだということになる。

「ポスト・トゥルース」時代の書物

私は一九九六年に就職して出版界に入った。あまりうれしくない数字を改めて掲げるなら、偶然とはいえ私が就職したのは出版界の販売金額がピークを迎えた年で、二兆六五〇〇億円に達していた。それから二〇年以上経ったが、その間、前年比割れを一度も回避できないまま、二〇一七年には一兆三七〇〇億円（電子書籍を除く）まで落ち込み、つい先頃発表された推定値によれば、二〇一八年は一兆二九二〇億円（同）となって、ついにピーク時の半分を割り込むところまで至っている。

その一方で、新刊点数に目を向けると、一九九六年は六万三〇〇〇点だったのに対して、二〇一七年は七万五〇〇〇点。さらに一九八〇年代に遡ると、三万点台で推移していた。そこで単純に日割りした数字を出してみると、一日あたりの新刊点数は、一九八〇年代は八〇～一〇〇冊だったのが、一九九六年には一七〇冊強になり、さらにここ数年は二〇〇冊を越えていることが分かる。要するに、新しく出版される本の数は倍になって、売上の金額は半分になった。

これは、作り手の側から見れば、一冊に割ける時間や労力が減ってきたということであり、そして意外に見落としがちだが、新刊一点あたりの売上が落ちたということは、一冊あたりで見れば、読んでくれる人の数が少なくなった

ということでもある。

このことは何を示しているだろうか。それを考えていて思い出すのは、入社直後の研修のことである。会社の各部署の説明を受けたあと、製紙会社から始まって、印刷所、製本所、製函所を見学し、取次の倉庫を訪れたあと、一週間、書店の店頭に立たせてもらった。そうして研修が終わったあとに提出した感想文で、書物とは「内容」、「物質」、「商品」の「三位一体」ではないか、と書いたのを覚えている。

製作部や業務部、そして営業部や販売部といった部署をそなえた会社で編集部に所属していると、「内容」にばかり意識が向いてしまうことがある。実際、私も編集部を志望した時に考えていたのは、もっぱら著者や内容のことだった。だが、言うまでもなく書物は何よりもまず「物質」であり、組版や用紙、造本にどれだけ力をそそぎ、思いを込めたかが、その本のたたずまいに反映されるというのは、本作りに携わる人なら誰でも感じていることだろう。そして、どんな過程を経て作られるにせよ、書物は最終的に市場に送り出される。そうである以上、市場で「商品」として成り立たないものばかりになってしまうなら、そもそも本作りを生業として維持できなくなってしまうということもまた自明の事実である。

そう思うと、入社直後の自分もなかなかいい線いっているではないか、と感じないでもないが、その一方で、そこには書物が「経験」そのものであるという観点が皆無だったことにも気づかされる。そして、その「経験」としての書物こそ、この二〇年の中で失われてきたものであることを、私は否定できない。その背景には、新刊点数が爆発的に増えたのに反比例して、一点あたりの読者が減少した結果、同じ本を読んでいる人と出会う機会が少なくなったという現実があるだろう。

同じ曲の異なるCDについて複数の著者が記憶のネットワークを交錯させる時に立ち上がってくる共通感覚のようなものは、まったく自明ではなくなった。それが立ち上が

岩波新書

世界史の実験
柄谷行人
本体780円
ジャレド・ダイアモンド、エマニュエル・トッドらを援用した柳田国男をめぐる卓抜な「文学」と「日本」批評。

日本をどのような国にするか
—地球と世界の大問題
丹羽宇一郎
本体760円
米中貿易戦争、地球温暖化、巨大地震の脅威、AIブームの真贋…。日本を取り巻く大問題について考える。

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

ってくるようにあえて意図しないかぎり、著者であれ、読者であれ、一人一人のネットワークは孤立したままであるほかなくなった。

その結果として「損／得」という基準が力を増すのは当然のことだ。共通感覚がないのなら、一人一人のもつ趣味嗜好はそれぞれが正しく、その優劣を決めうるものがあるとすれば「数字」くらいしか残されていない。ランキングが増えた背景には、そんな現状があると私は思う。

そして、その現状は、しばらく前から「ポスト・トゥルース」と呼ばれている。

「物語」から「歴史」へ

書物をめぐる記憶のネットワークのことを、私は今回の新著の中で「観念連合」と呼んだ。イギリス観念論でクローズアップされた「観念連合」とは、ある考えやアイデアが別の考えやアイデアに結びついていくことを示す言葉である。日本語では「連想」というほうが近いかもしれない。この言葉を思いついたのは、観念連合では、何かが何かに結びついていく理由が自分で分かる場合もあるが、むしろ自分でも皆目見当もつかない場合が多い、ということに気づいたからだ。

だが、そのとき結びついていくのは観念だけではないだろう。記憶も結びつき、イメージも結びつき、そして経験も結びつく。ならば、それは単に「連合（association）」と呼んだほうがいいかもしれない。

ネットワークをなす連合は、いつも広がっているし、複雑になっていく。そして、そのネットワークの中にあるのは、私の観念や記憶や経験だけではない。連合そのものが交錯し、縺れ合い、分裂したり融合したりするのは、さほどめずらしいことではないだろう。そうして、それは私の連合と呼べるものかどうかすら分からなくなる。書物と書物が織りなす連なりは、そんなふうに個を越え、空間を越え、そして時間を越えていく。

そうした連なりのありようが、今回の新著で國分さんが強調している「物語」というものだと私は考えている。この二〇年が「大きな物語」の終焉から始まる期間だったとすれば、現在は「小さな物語」しかなくなった時代、そして一つ一つの「小さな物語」が孤立している時代だと言える。それらは孤立した記憶のネットワークである。その孤立に居直ったとき、「自分の知りたいことしか知りたくない」と表現しうる「ポスト・トゥルース」の状態が現れるだろう。

その状態に何より抵抗しなければならないのが、人文書と呼ばれる書物ではないだろうか。

人間とは何かを考え、人間が人間であることの条件は何か、いかにして生きるのが人間であることなのか、そしてどのように世界を捉え、どのように社会に関わることが人間であることなのか——そうした問いを立てるのが「人文

学（humanities）」の真髄だとすれば、人文書が提示するのは「問い」であって、決して「答え」ではない。

「自分の知りたいことしか知りたくない」のなら、求める「答え」が書かれている本こそ価値が高いことになるだろう。求める「答え」が書かれていなければ、せっかく買ったのに「損」をした、と思うことになるだろう。その基準からすれば、同じ「答え」が書かれているなら「有料よりタダのほうが得」ということになるのも当然である。

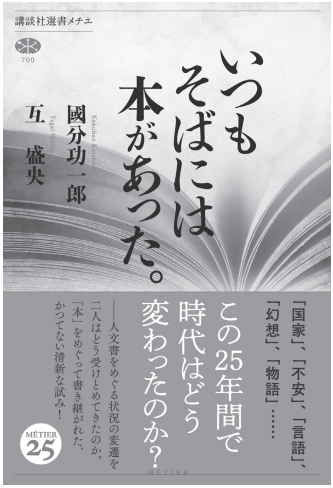
だからといって、「大きな物語」を復権させればよいということではないだろうし、復権させることなどできはしない。

では、どうすればよいのか。

私はシンプルなことだと思う。ソクラテスの「問い」を引き受けたプラトンは、その問いに「答え」を出すのではなく、新たな「問い」を立てた。そのプラトンの「問い」を引き受けたアリストテレスもまた同じように新たな「問い」を生み出した。その連なりは、古代ローマを経てイスラーム世界に移り、そこから逆流しつつ中世にルネサンスをもたらし、そして今日につながる近代へと至っていく。書物は、いつもその連なりの中からやって来る。そして、書物がその連なりを現在につなげてくれているからこそ、現在の「物語」はその連なりに参入することで「歴史」の一部をなすことになる。だからこそ、ドイツ語やフランス語では「物語」も「歴史」も“Geschichte”や“histoire”という同じ言葉で表すのだろう。

「物語」を「歴史」にしていくこと――それは「連合」という名の記憶のネットワークが交錯し、厚みを増し、豊かになることだ。「経験」としての書物は、はるか二五〇〇年前のギリシアに遡る歴史に連なるとき、まだ見ぬ未来にも向かっていく。

その連なりのささやかな一例を示すために、私は國分さんと本を書いた。この本は決して完結していない。手にしてくれる一人一人の記憶のネットワークと交錯することを、いつもこの本は待っているだろう。



國分功一郎・互盛央『いつもそばには本があった。』（講談社選書メチエ、2019年3月刊）

ポスト・ヒューマンの時代における人文学・人文書

長谷川一（明治学院大学文学部教授）

二〇一九年にあらためて書物、とりわけ人文書について考えることに、どんな意味があるだろう？

1

『出版と知のメディア論――エディターシップの歴史と再生』（みすず書房、二〇〇三年）は、ぼくが最初に出版した単著だ。販売面ではたいした数字を残すことができなかったにもかかわらず、反響は意外なほどあり、あちこちから興味をもっていただくことができた。とりわけ、数名の人文書編集者を含め、少数ながらも貴重な理解者にめぐり会うことができたのは僥倖だったと感謝している。

おそらくいまでもそうだろうが、一般に出版とは、文学や学術といった著述を中心とした知識生産活動を支える二次的なしくみと見なされている。この本でぼくは、そうした従来の前提から離れ、とくに人文社会科学系の学術出版に着目したうえで、出版と学術という二つの活動態を複合したひとつの系ととらえる視座が成り立つかどうか、成り立つとしたらどこまで有効かということを検討しようとした。

このような問題意識は際だってメディア論的だと、ぼくはいまでも固く信じている。しかし、そのメディア論的要諦は必ずしも読者の多くと共有できたわけではなかった。発想も着眼点も既存の出版研究本とはかなり異質で尖りすぎていたせいかもしれないし、若書きで稚拙な書きぶりのせいかもしれない。ぼくの感触では、多くの読者は、出版産業のあり方への危機感から、あの本を手にとってくださったようだった。

2

当時――というのは二〇〇〇年代前半から中ごろにかけてのことだが――出版をめぐってひとびとが関心をもっていたトピックは、大きく二つあった。ひとつは冊子の書物の電子化、もうひとつは出版産業の主として流通システムをめぐる構造的限界である。この二つの主題は表裏一体に結びついており、出版業界にとっては（ある意味では当然ながら）実際には後者が中心課題だった。前者は、あるときには既存の出版システムにたいする「脅威」としてとらえられ、またあるときには既存システムに延命や変革や再生をもたらすかもしれない「未来」として語られた。そして、ぼくの本も、もっぱらその文脈に引きつけて受けとられたようだった。その流れで、書物にかかわる諸業界の方がたから声をかけていただき、多くを学ぶことができたのはありがたい経験だった。しかし、なかには首をかしげざるをえない場面に遭遇することもあった。

ある会合によばれて話をしたときのことだ。参加していたのはベテランの――ということは、それなりに責任ある立場にあったはずの出版業界関係者たちである。かれらはぼくの話を聞き終わると、口をすぼめるようにして、こう言った。

「それで、どうすればいいんですかね？」

初めは、なにかの冗談かとおもった。が、かれらの表情から、そうではないのだとわかった。ぼくのなかには、戸惑いとともに、「やっぱりな」と言いたくなるような気持ちが沸き起こった。そうならなければいいのに、という負の期待が、しかし現実になってしまったときにいだく感情である。

かれらは教えてほしかったのだ。何を？「答え」を。みずから疑問を見つけ、それについて考えてゆこうとするのではない。そうではなく、すでになにか「答え」らしきものをつかんでいる（ように見える）ひとをつかまえ、てっとり早く教えてもらおうとしているのだった。かれらは出版人として長年にわたり人文学に多大の貢献をしてきたはずである。だが、そのときの態度は、人文学的なものが涵養しようとする姿勢からもっとも遠く離れているといわざるをえないものだった。

しかも、かれらは、じぶんたちの求める「答え」を知らなかったのではなかった。逆にかれらは、かれらが求めている「答え」を知悉していた。なぜなら、かれらは、じぶんたちが聞きたいことを聞きたかったからだ。そして、かれらが聞きたい言葉がどんなものか、ぼくにはかなりはっきりと見当がついた。というのも、当時ぼくは大学院で勉強する身でありながら、本業はまだ現役の大学出版部の編集者であり、それまでの十数年間にわたる現場経験をとおして、業界の生態系についてそれなりの理解をもっていた

からだった。

一種のサービスとして、ほんの少しでも、かれらの望むようなことをしゃべればよかったのかもしれない。けれどもぼくは、かれらが聞きたいような話を最後まで口にしなかった。かれらにしてみれば、物足りなく、期待はずれに感じられただろう。コイツつかえないやつだな、とおもわれたかもしれない。

3

もし、かれらが聞きたいようなことを言ってあげたとしたら、どうだっただろう？　内容はどうあれ、それはまちがいなく「予言」の形をとった言い方になったはずだ。予言とは、いま起きている現象の「本質」はじつはこれなのです、だからつぎにこんなことが起こるのです、というタイプの言明のことだ。誰も気づいていないがわたしにだけは見える、といった調子で、むやみやたらに自信ありげな断定口調だと、なお効果的である。昔も今もメディアにかんする俗流の言説には、なぜかこの手の予言御神託タイプが少なくない。きっとマクルーハン（のエピゴーネンたち、より正しくいえば）がいけないのだろう。かれのスタイルがあまりに強烈すぎたのだ。

予言とは未来の先取りである。だが未来とは、いまだ到来していないから未来なのであって、どんな形であれ到来したら未来ではなくなる。つまり端的に、未来のことなど誰にもわからない。だから予言は、株価予測におけるテクニカル分析や競馬の予想屋の講釈と同じようなつもりで聞いておくぶんにはとくに実害はないのだが、ひとはしばしば、というか、しょっちゅう、この自明の理を見失う。なぜなら、欲望するからだ。

この欲望には二種類ある。未来がわからないことに不安を覚え、その不安を埋めあわせるために未来を先取りしたいというのが、ひとつめだ。もうひとつは、誰よりも先に未来を知ることができれば、他人を差しおいて有利に立ちまわることができると目論むことである。よい例が、映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー2』の悪役ビフ・タネンだ。ビフは拾ったスポーツ年鑑をかかえてタイムマシンで過去へゆき不正に賭博で勝ちまくったあげく、劇中の「未来」である二〇一五年において大富豪のカジノ王として君臨している。あの戯画的な姿こそ、「予言」に惹かれるひとを突き動かしているものなのだ。（ビフのモデルはドナルド・トランプで、あらためて見るとそっくりだ。現実の二〇一九年からすると洒落にもならない話だが。）

予言的言明は、未来を先取りしたいと欲望する聞き手と、期待に応えてかれらが欲する「未来」を示すことで利益を得ようとする語り手とのあいだにおいて成立する。ひらたくいえば、予言的言明とは、予言者が一方向的に与えるものではなく、聞き手との共同製作による産物なのだ。ここ

において両者の関係性は、ある種の教祖と信者のあいだのそれに似た性質をもつことになる。そのような関係性それ自体は、人間社会において広く認められる事象である以上、とくだんに否定されるようなものではないかもしれない。ただ、ぼくの考えでは、研究者がそのようにふるまうことは厳に慎むべきだとおもう。研究者は予言者ではない。どうふるまったところで予言者にはなれないのだし（たとえマクルーハンであっても）、なる必要もない。むしろ、けっして、なろうとしてはならないものなのだ。

どんな事柄であれ、主体はあくまで「当事者」である。研究者にできることは、現状に的確な診断をくだし、理論的・思想的あるいは歴史的な地図を描き、実践的な道具をこしらえ、その有益な使い方を開発・提供してゆくことであって、それ以上でも以下でもない（ただし研究者自身が「当事者」になるというなら話は別だが）。そして、これら研究的知見を有効に活かしてゆくために必要となる前提条件は、現場の当事者があきらめず、考えつづけようとすることであるだろう。人文書出版においても、もちろん例外ではない。

4

同じころ、あるひとがこんな助言をしてくれた。きみはずっと出版を主題にしてゆくべきだと。率直かつ誠意をもって与えてくれた言葉であることはよくわかったし、ある意味ではきわめてまっとうなアドバイスだった。しかし、こうした意見に従うつもりは、最初からなかった。

個々の学問分野は、社会のなかで分節されたカテゴリーに対応する形で成り立っているという認識は、広範に見られるごく自然なものだろう。経済にたいして経済学、農業にたいして農学、というように。より細分化されたカテゴリーについてもやはり、マクロ経済学だとか育種学といったぐあいに、社会的カテゴリーと学問分野とのあいだに対応関係が認められる。同様に「マスコミ」とくくられる諸業界でも、「テレビ研究」「新聞研究」などのように、個々

敗北者たち
第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917–1923
ゲルヴァルト　大戦後のヨーロッパを席捲した暴力は、ジェノサイドの道を準備した。現代史の新たな扉。小原 淳 訳　¥5200

共食いの島
スターリンの知られざるグラーグ
ヴェルト　第二のグラーグ「強制移送・遺棄」の実態が初めて明らかに。発端はシベリアのナジノ島の悲劇。根岸隆夫訳¥3500

ドゥルーズとマルクス
近傍のコミュニズム
松本潤一郎　資本主義を歴史へと帰還させること。ドゥルーズ哲学と「歴史家」マルクスとの遭遇から探る近傍ゾーン。¥2700

ショパンの詩学
松尾梨沙　死後 150 年も謎だったピアノ曲《バラード》の意味。歌曲群を梃子にこれを解き、ショパン像を一新した快挙。¥4600

ケースで学ぶ 自閉症スペクトラム障害と性ガイダンス
田宮 聡　児童精神科医が 120 のケースを元に、性にまつわる支援の心構えを解説。教育関係者、医療従事者、援助職必携。¥2700

現代物理学における決定論と非決定論［改訳新版］
カッシーラー　量子力学的世界を哲学的に基礎付け、科学と哲学を架橋。カッシーラー哲学全要素の結接点。山本義隆訳¥6000

コレージュ・ド・フランス講義草稿
メルロ＝ポンティ　遺稿となった講義草稿（1959–1961）を編む。晩年の思索を十全に伝える待望作。松葉・廣瀬・加國訳 ¥7800

東京文京本郷 2丁目 20-7　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
www.msz.co.jp

のマスメディア業界と学問分野とが一対一に対応し、両者が相互に依存しあっている。ここには一種独特の風習がある。学位や学術的業績の有無にかかわらず、一定の年齢に達した業界人がセカンドキャリアとして大学教員に転身するケースが見受けられるのだ。そして、かれらこそが「顔役」として、当該マスメディア業界と大学業界とを直接に結びつける枢要な役割をはたしている。業界内に顔が利き、業界紙に寄稿したり、学識経験者として審議会の委員を務めたりといった形で、当該業界の内部にたいしてはご意見番的・コンサル的な役回りを演じ、外部にたいしては業界の利益代表として、ロビイストのように立ちまわる。

こうした顔役的ポジションは、業界と学界、双方の利害を一致させようとする力学のなかで機能する。その意味で一定の必要性があるのかもしれないが、ぼくにはよく理解できない。たしかにぼくも編集者出身ではあるが、出版業界とのあいだでそのような立場にありたいとはついぞ考えたことがないし、そんな能力は一片ももちあわせていない。そもそも「顔役」は業界内で功成り名を遂げたエライひとがなるものだろう。ぼくが研究者になったのは、もろもろの関係性から一定の距離をとることで、みなが見落としていることまで含めてよく観察し、できるだけ自前で思考してゆきたいからである。それに、メディア論でいうメディアとは必ずしも、一般におもわれているような個別のメディア技術や産業（テレビ、新聞、出版、広告、ＳＮＳといった）のことや、それらの集合をいうのではない。

やがてぼくは、出版や書物という主題について、長い沈黙に入った。その後の仕事は、たとえば『アトラクションの日常――踊る機械と身体』（河出書房新社、二〇〇九年）や『ディズニーランド化する社会で希望はいかに語りうるか――テクノロジーと身体の遊戯』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）などにまとめられている。ぼくの学術的関心は一貫しているのだが、傍目からは、それまでとはかけ離れた主題へ転じていったように見えたかもしれない。出版論の側でも、ぼくの名前は忘れられていっただろうとおもう。

ひるがえって二〇一九年の今日、気がつくと広場には誰もいなくなった。あれほど大勢が語っていた本の電子化や出版産業の縮小という話題は、ほとんど聞こえない。もはや論じる段階を過ぎ、現実になってしまった、ということなのだろうか。「本の電子化」という言葉さえ、いまや古色蒼然たる響きを帯びはじめている。そして少数の例外があるとはいえ、出版業界のひとたちの多くは、縮小をつづける出版市場のなかで日々やりくりするのに追われ、すっかり疲弊してしまっているように見える。

5

この間、人文社会科学系の知のほうも逆風にさらされつづけてきた。人文学を勉強してなんの役にたつのかという

類いの浅慮はずっと以前から――少なくともぼくが学生のころから――根強く存在するが、国の高等教育政策における人文系のあからさまな軽視の傾向は、人文社会科学系の知識生産システムを根本から掘り崩しつつある。発達したデジタル技術が生活のすみずみにまで浸透し、グローバル資本主義と政治力学が複雑にからみあい、社会と文化のあり方が大きく変容してゆくなかでは、いずれにせよ人文学もまた以前と同じ姿のままではいられないだろう。

デジタル・ヒューマニティーズは、こうした逆風にあらがう前向きな取り組みのひとつだといえる。デジタル技術を積極的に活用することで、知的資源の保存・研究・発信の方法を変え、ひいては人文学そのものをアップデートしてゆこうというのが、その趣旨である。

ただ、現時点においてデジタル・ヒューマニティーズは、技術論・方法論が先行しすぎているように見える。デジタル・アーカイヴの構築や学術情報の電子的な公開・展示などといった試みが重要なチャレンジであることはまちがいない。だがぼくの目には、そうした取り組みは、けっきょくのところ従来紙の冊子でおこなわれていたことをデジタル技術に発展的に置き換えようとしているように映る。根本にある発想の枠組みそのものは、工学的な情報中心主義に彩られており、かつて本の電子化の議論で支配的だった考え方と比べても、それほど大きな違いは見出せない。すなわち、知識を情報ととらえる見方と、その裏返しとしての物質性の軽視である。こうした見方にたつかぎり、メディアはつねに内容を支え流通させるための二次的な手段にすぎず、ゆえに、より新しく多機能で高性能なものに代替可能と位置づけられてゆく。

6

ぼくはおもうのだ。「デジタル・ヒューマニティーズ」という表現はもうひとつ重要な意味をもちうることを忘れてはいないだろうかと。ヒューマニティーズ humanities はたしかに、通例日本語で「人文学」と訳される、比較的大きなひとつの学問分野の名称である。しかし同時にこの言葉は、「人間」あるいは「人間性」を意味してもいるはずだ。近代の人文学は、歴史や文化や社会にかんする知識を生産するだけでなく、研究と教育の両面をとおして「人間」や「人間性」を探求・規定・実装しようとしてきたプロジェクトだった。そうであるのなら、デジタル・ヒューマニティーズという言葉は、デジタル技術とグローバル資本主義とが複合的に浸透した今日の社会における「人間」や「人間性」のあり方を考究する学問として転生する可能性を含んでいるだろう。いいかえるなら、それはポスト・ヒューマン（人間以後）の時代において、いかに「人間」は可能かという課題を検討するプロジェクトだ、ということである。

こうも考える。『出版と知のメディア論』以来さまざまに考えてきたことを土台にするならば、近代の人文学は、それを支えた出版システムにおいて基軸メディアであった冊子の書物の物質性と不可分の関係にあったことが示唆されよう。それは近代の人文学を支えてきた「人間」や「人間性」のあり方とも深くかかわってきたはずだ。であるのなら、ポスト・ヒューマンの時代とは、冊子の書物の希薄化という事象と連動している可能性がある。その視点から、ポスト・ヒューマン時代におけるヒューマニティーズについて検討してゆく道が開削できるのではないだろうか。さらにいえば、この問いはおそらく、ポスト・ヒューマンの時代において人文書はいかに可能かを検討することにかぎりなく重ねあわせることができるのではないか。

こうした探求は、みずからの存立の基盤を一度ほぐしてばらばらにし、あらためて編みなおすような作業であるはずだ。そこに向かって最初の一歩を踏みだす、その仕方を考えることが、ぼくがじぶんに課している課題のひとつである。

7

冒頭の問いに戻ってみる。二〇一九年にあらためて書物、とりわけ人文書について考えることに、どんな意味があるだろう？

ぼくにとって、その意味は明瞭だ。二〇一九年の現在にかぎらず、ぼくに生あるかぎり、つねに明瞭だろう。先述のとおり、ぼくは長らく出版や書物について沈黙してきたが、その事実は、この主題に興味を失ったことを意味しない。ぼくはぼくなりのやり方で、世界を観察し、思考しつづけている。たとえ広場に誰もいなくなったとしても、ぼくには関係のないことだ。

そして、その思考の道筋をいずれひとつの書物にまとめたいと考えている。ただし物事にはすべからく適切な時期というものがある。その時期なるものがいつ到来するか、それはいまはわからない。なにしろ未来のことだから。願わくば、この短い文章を読んでくれたあなたと、いつかその時期が来たときにふたたび出会えることを。それまでおたがい、それぞれの持ち場で粘りづよく考えつづけよう。

グッドラック。

特集＊出版と知の未来

学術書を出版する意味——情報化のなかの知識・流通・読者

橘　宗吾（名古屋大学出版会）

学術を含む社会の情報化が進み、書物のあり方も変化にさらされている。そこでしばしば聞かれるのは、変化する中でも、これまで培われた大切な要素は守っていこうという言葉である。だが、その要素が何かを同定する議論は少ない。しかしそれを明らかにしなければ、単なる現状維持にとどまろうとすることになり、それは不可能なことだから、結果的には、なし崩しに事態が進むだろう。そうならないためにも、その「大切な要素」を見定める必要がある。それは、この文脈での自由の領域を示すことにもなろう。本稿では、このような観点から、知識の情報化との関連で、学術書を出版する意味について考えてみたい。

書物は見えているか——知識の作品性と「論文」

現在のアカデミアでは、理系的な学問観が支配的になる中、ジャーナル論文が評価の中心に置かれ、書物というメディアの位置づけがわかりにくくなっている。なぜこんなことになっているのか。その前に、論文と書物（学術書）の違いはどこにあるのか。もし違いがないのなら、「論文だけあれば十分で、本もあっていいが所詮はおまけだ」といった声に、どう応答できるだろうか。

ここで手がかりにしたいのは、そもそも論文自体に違いがある、つまり、同じく「論文」と呼ばれていても、学問分野によってその意味が大きく違う、ということである。それぞれの学問分野が社会の中で占める位置や、内部構造も違う以上、各分野で書かれる論文の役割も違うはずだ。

例えば、機械工学という分野の論文と、歴史学という分野の論文を比べてみると、前者では、実験に基づく速報性が重視されるのに対し、後者では、史料を読むことに基づく叙述性が大切にされる。また機械工学なら、世界規模の専門家にむけて、英語で書くことが推奨されるが、歴史学、

特に日本史であれば、まずは日本語で書くだろうし、書物のかたちをとることで読者は、狭い意味での専門家の範囲を超えていく。そしてよく言われる、何の役に立つかという点でも、機械工学であれば、論文の外に機械という「物」を生み出すことでその機械の利用者に役立つのに対し、歴史学の論文であれば、それ自体が「文」として読者の歴史認識やアイデンティティなどに働きかける。文自体がそのためのマシーンだと言ってもよい。

このように論文のあり方に違いがあることは、一見あたりまえのようだが、理系・文系含めて様々な研究者の話を聞いていると、他の分野でも自分の分野と全く同じように――自分の分野のやり方を当然の前提として――「論文」が書かれ、流通し、読まれているかに話されることが多く、それがもとで様々な誤解が生じていることがわかる。つまり、同じ「論文」という言葉で、相当違ったものを指しているのに、互いに気づいていないという状態なのである。

その結果、多くの文系研究者がするように、いくつもの論文を積み重ねて、それを土台に体系化するかたちで学術書を書き、自分の研究のまとめ・区切りとする、という行動パターンやキャリアパターン、そこでの論文や本の位置づけは、多くの理系研究者の視野の外に出てしまっている。

多くの理系研究者にとって書物は、研究分野の包括的なレヴューか、教育・啓蒙用で、いずれにせよ二次的なものだから、多くの文系研究者のように、それが自分の研究の一つの到達点で、時間的には論文より後から出来る書物の方が一次的なものだということは、見えにくいのである。

逆に、論文や書物を文章と一体のもので自分の作品だと感じている多くの文系研究者からすれば、多くの理系研究者がしているような、極端な場合一〇〇人も共著者が並ぶ論文のかたちは、理解しづらい。自分が直接執筆していないのに共著者であるとはどういうことか？というわけだ。

少なくともこうした違いを、多くの理系分野の論文が電子ジャーナルを中心に流通していることをしっかり踏まえて考えることが、書物との関係を見る上で必要である。

そこで、長谷川一氏や鈴木哲也氏らの著作を導きの糸として考えてみると、次のような構造が浮かび上がってくる。

――今、「情報発信」が強調されており、学問についても、「学術情報」という言葉があるように、知識を情報としてだけ捉えることが幅をきかせている。電子ジャーナルもこうした考え方の中で動いているが、しかし知識には、情報としての側面だけでなく、いわば身体性に根ざした、しかも体系性や全体性を志向する側面もあるはずだ。それを知識の、作品としての側面だと捉えられるのではないか。

つまり知識には、情報としての側面と、作品としての側面がある。そして論文は、知識を担うという点では同じだが、その中に（つまり、一括りに論文と呼ばれる文章の中に）、情報性が強い論文と、作品性が強い論文、の二つがあるのではないか。そしてこの違いがおよそ理系の論文と文系の

論文の違いに対応する。このうち情報性の強い論文の方が電子ジャーナルなどには適合しており、あるいは適応する中で情報性を強めてきたのに対し、身体性をもって体系性・全体性をめざす作品性の強い論文の方は、書物へと展開し、そこでこそ完成する、と捉えられるわけである。

そうすると、現在の、ジャーナル論文中心の理系的学問モデルが支配的になっている学問の世界で、なぜ書物というメディアの位置づけがわかりにくくなっているのかを、知識のあり方の問題と関連づけて捉えることができる。

上で論文と書物の違いを問うたが、本当の違いは、論文自体の違い、いや、知識の二つの側面・方向性にあって、論文の違いは、情報性と作品性の度合いの違いに基づいている。実際に存在するのは、情報性の強い論文と作品性の強い論文、及び後者が展開して完成した書物なのである。

そして、大学や学問をめぐる言説や政策の中で、知識の情報としての側面にばかり焦点があたることで、作品としての側面が見えなくなり、当然、それを体現した書物も見えなくなっている――そういう構造がわかるのだ。

むろん、それでよいというわけではない。では、知識の作品としての側面が見えなくなり、それを体現した書物も見えなくなると、何がいけないのか。それは、特に社会との関係で問題になり、読者が見失われるというかたちで現れてくる。次にこの点を考えてみたい。

読者は見えているか――知識の「専門」性と流通

現在、世界がシームレスにつながったと言われるようなインターネット等による情報の流通があるが、それは情報爆発とも言われ、知識の細分化、断片化という全般的状況が指摘されている。こうした中、知識の情報としての側面と作品としての側面は、単純化して言えば、情報の電子チューブによる送信と、作品の市場による販売、という回路でそれぞれ流通しているように見える。

つまり、学術電子ジャーナルであれば、ジャーナルという電子チューブを通じて「学術情報」を流す。ユーザーか

新刊案内

◎「国連の日」となり地球レベルの奔流となった新たな動きを追う
伊藤セツ著
増補版 国際女性デーは大河のように
A5判・二一〇頁・本体二六〇〇円
二〇〇四年以降の日本と国連の国際女性デーの主要動向を年表として作成し、必要とされる解説を補章として附す。

◎人口減少や都市の荒廃、貧困などと戦うメカニズムを探る意欲作
仁科伸子著
人口減少社会のコミュニティ・プラクティス――実践から課題解決の方策を探る
本体四三〇〇円＋税

◎女性のリーダーシップとは何か、それをどう涵養し、発揮していくか
昭和女子大学女性文化研究所〔坂東真理子所長〕編
ダイバーシティと女性――新しいリーダーシップを創る
本体四〇〇〇円＋税

◎産業の変化は米国の都市・地域にどう影響したか
明石芳彦著〈大阪商業大学比較地域研究所研究叢書第十八巻〉
進化するアメリカ産業と地域の盛衰
本体三二〇〇円＋税

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://rr2.ochanomizushobo.co.jp/

ら見ると、ジャンル名等を示すタイトルのついたチューブのセットを、主として大学など研究機関（特にその図書館）が購入し、研究者が利用するというかたちをとっている。むろん、そこにもいちおう市場はあり、価格高騰が問題になるのもそのためだ。しかし、学術ジャーナル出版社から研究機関がチューブのセットを購入する（B to Bモデルが中心の）かたちになっているため、ユーザーたる（研究機関所属の）研究者には市場が意識されにくく、少なくとも、チューブを流れる個々の「学術情報」の単位、すなわち論文を購入するという意識には乏しいだろう。

これに対して、学術書であれば、一つ一つが別個の名前をもち独自のアイデンティティをもった――身体性・全体性・体系性をもった――独立した作品として、書店等の市場を通して、主として個人読者が購入する。たしかに図書館の購入も無視できないが、日本の場合、大多数は個人が、ネット書店を含む書店から購入する（B to Cモデルが中心の）かたちになっているため、その都度の買う行為の中で、個々の作品を購入する意識が働くと考えられる。

前者の流通形態は、電子ジャーナルによる「学術情報」が、特定の専門研究者共同体（研究機関とは別の、大小の学会のような単位）の内部に、ほぼ範囲が限られて流通するあり方に対応している。逆に言えば、流通範囲が専門性の外延、境界線を示すことにもなっており、こうした専門性のあり方を、藤垣裕子氏は「ジャーナル共同体」と呼んでいる。これは紙媒体を中心とする時代から存在したが、それが強化され、極端化しているのである。

これが専門性の強度を高める点で好ましい部分をもつことは確かだが、他方、専門分野の細分化を推し進め、タコツボ化を悪化させていることも間違いない。これについてJ・A・エヴァンズ氏は、電子ジャーナルによる「学知の狭隘化」として『サイエンス』誌に論文を発表している。

こうした学知の情報化は、その量による評価、つまり論文数が多いほど良いという価値観を伴っており、それをよく示すのが、MPU（Minimum Publishable Unit）で論文を書け、という考え方だ。そこには、論文数を増やすことだけでなく、余計なことを書くと査読を通りにくいという考慮もあるとされるが、その反面、知識の全体性や体系性は論文の外に委ねられ、それらへの接触を極力少なくするという姿勢が表れている。論文の情報性が極端に推し進められ、逆に作品性は極限まで希薄になっているわけである。

そして量による学知の評価が、論文数の大量化をもたらし、学術電子ジャーナル価格高騰化の大きな要因となっていることも指摘されている。ちなみにこの関連でよく言及されるオープンアクセスも、量による評価自体を転換することにはなっておらず、むしろ、論文を量産することで、それを助長する面があることを認識しておく必要がある。

こうした「学術情報」の大量化が、学知の細分化、狭隘化を推し進めており、その結果、専門性による学知の分断、

ないし専門性への分断がいっそう進んでいることは見て取りやすいだろう。つまり、専門性が高度化して細分化が進んでいるだけでなく、個々の専門性が過度に強調される——当事者の意識としても、環境や仕組みとしても——事態になっているのである。そして繰り返せば、それとともに、論文の読者の範囲はそれぞれの専門家共同体、「ジャーナル共同体」の内部に強く限定され、学知を相互に、また社会に対しても閉ざす結果になっていると考えられる。

これに対し学術書は、そうではなく、そうした傾向を是正しうるものだと、次に言いたいのだが、ここでは、学術書の流通システムや読者のあり方との関連で、学術書という言葉で指しているものを明確にすることを通して、この点を述べてみる。

学術書出版社では多くの場合、研究書・教科書・教養書を出版しており、合わせて学術書と呼んでいる。それぞれ「大学における研究成果の公表」「学部・大学院レベルの学生・院生の教育への寄与」「研究成果をかみ砕いて一般社会に知らしめること」という役割を担うとされる。

しかしこの捉え方は、誤解を招きやすい面ももっている。研究書を、教科書・教養書と区別することで、それが電子ジャーナルと同様に、狭義の専門家共同体、「ジャーナル共同体」の内部に閉じたものだと考える錯覚を起こしやすいのだ。だがそれは間違いである。

まず大事なのは、研究書も、教科書・教養書も、主に（ネット書店を含む）書店を通じて流通しているということである。しかも他の、いわゆる一般書などと一緒に。

これは日本の出版流通システムの特長なのだが、雑誌と書籍を分断せず、一般書と専門書、また教養書・教科書と研究書との間も分断しない。橋元博樹氏はこれを「一元的なプラットフォーム」と呼んでいる。たしかに、研究書を実際に置いているのは、多くは大書店や専門性をもった書店、大学等にある書店だが、諸外国のように流通システムが分断・複線化しているわけではなく、小さな書店でも注文すれば、研究書も他の本や雑誌と基本的に同じルートで

ここが変わる！
日本の考古学
先史・古代史研究の最前線
藤尾慎一郎・松木武彦編　各時代の最新のイメージと分析手法の進展を平易に解説。　2000円

再考！縄文と弥生
日本先史文化の再構築　2400円
国立歴史民俗博物館・藤尾慎一郎編
数値年代でみる新たな先史文化像へ。

事典 **古代の祭祀と年中行事**
岡田荘司編　恒例祭祀・臨時祭祀・法会などを厳選して計60件を収載する。　3800円

日本古代の歴史 全6巻
ついに完結！　各2800円
❻**列島の古代**
佐藤　信著　古代史の新たな輪郭を浮き彫りにする！　（最終回）
〈既刊〉　『内容案内』送呈
❶倭国のなりたち……木下正史著
❷飛鳥と古代国家……篠川　賢著
❸奈良の都と天平文化…西宮秀紀著
❹平安京の時代……佐々木恵介著
❺摂関政治と地方社会…坂上康俊著

朝河貫一と人文学の形成
海老澤　衷・近藤成一・甚野尚志編
彼の多彩な業績に光を当て、人文学のあり方を問い直す。　9000円

危機の都市史
災害・人口減少と都市・建築
「都市の危機と再生」研究会編　「日常のなかに潜む危機」という視座から都市史を再考。　11000円

オランダ別段風説書集成
風説書研究会編　幕府が求めた流動・変化する海外情報。各地の残存写本を厳選し収録。　15000円

近代東京の地政学
青山・渋谷・表参道の開発と軍用地
武田尚子著　新旧が交錯する街はどう作られてきたか。　1900円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税別

届く。また、書店で書籍が雑誌とともに販売されることによって、両者の間で読者が階層分化するのを抑制するなど、研究書であってもより広い範囲の人々の目に触れる機会をもってきた。しかも、橋元氏の言うように、雑誌から書籍への「内部補助」、またしばしば教養書・教科書から研究書への「内部補助」が行われ、その効果として、諸外国と比べて書籍、なかでも研究書は相対的に安い価格で買える状態が続いてきた。つまり研究書が相対的に安価で、比較的入手しやすく、広い層の人々の目に触れる機会をもってきた、ということであり、その点が重要なのである。

そして読者の方も、じつは単純に研究者と、学生・市民とに分かれるわけではない。我々はともすると専門家と素人の二分法で捉え、前者にのみ研究書を割り振ってしまうが、現実には、真っ二つに分かれるわけではないのだ。

専門家といっても、研究テーマや対象が完全に一致するコアの専門家から隣接分野の研究者まで、専門性の度合いに差異をもちながら、研究書の読者になっている。他方、素人や市民といっても、なんらかの専門家であることが多く、また、それぞれの関心から勉強し、例えば自分の病気についてよく勉強して、ある程度の専門性を備えている人もいる。むろん、だからといって診療を行えるわけではないが、それについて読んだり話したりできる、つまりコミュニケーションできるということだ。

いささか乱暴だが、いま仮に専門性の度合いを一〇〇から〇％の幅で考えると、ある分野の一〇〇％専門家でも、他の分野では違う。しかし完全な素人かというと、七〇％の専門性をもつ場合もあれば、三〇％の場合もあり、三〇％の方はさすがに専門家とは呼べないだろうが、七〇％の方は場合によっては専門家としてふるまうし、そう見なされもする。例えば、専門性が問われる査読のような場面でも、一〇〇％専門家が担当することは案外多くなく、少しズレた研究者が担当している方が多いだろう。むろん、これはあくまで大づかみなイメージにすぎないのだが、専門家と素人の単純な二分法よりは現実に近い像だと考えられ、特に読者について考えるには、こうした部分的な専門性を考慮に入れる方が有効だろう。

そして教養書や教科書が一〇〇％専門家以外の人に読まれるのは当然だとしても、研究書の方も、一〇〇％の専門家だけでなく、専門性が七〇％や五〇％の人にも読まれる。つまり、研究書の読者は専門家だけ、教養書・教科書の読者は素人だけ、という見方は、実際の読者の範囲を狭めて捉えたものでしかないのだ。

これは本質的には、学術書が全体性や体系性をめざし、作品として市場で流通していることによる。そして日本の出版流通システムは、これまでこういうあり方に対応してきたし、学術書出版社も、研究者に、本をまとめるからには、隣接分野の研究者や、その本のテーマ・問題に知的な関心をもつはずの読者、つまり「一回り二回り広い読者」

に、なるべく開いた言葉で語ってほしいと要望し、こういうあり方に対応した編集や販売を心がけてきた。そうした努力も含めて、これまで日本の出版システムが日本の学術インフラを担ってきた、と言われるのである。

これは、研究書を研究書以外のものと同様に流通させることで、それが作品として読者に受けとめられるのを促してきた、ということだから、研究書を情報の器とだけ見る視点からすれば、不合理に見えるかもしれない。しかし、知識がもともと作品性と情報性を二つとも備えていることを想起すれば、決してそうではないことがわかるだろう。

要するに学術書は、研究書に限っても、ジャーナル共同体とは異なった広がり、「一回り二回り広い読者」をもちえてきたということだ。にもかかわらず情報中心、ジャーナル論文中心の現在のアカデミアでは、書物が見失われることで、こうした読者もまた見失われてしまうわけである。

しかし私は、今後も「一回り二回り広い読者」を大切にすべきだと考える。なぜならそれは知的な協働にもつながれば、市民的教養を培うことにもつながるからである。

このうち知的協働については、例えば東日本大震災への対応を思い起こせば必要性は明白であり、また一般的に環境問題など現代的問題が特定の専門分野だけでは解決できない複合性をもっていることは、U・ベック氏も指摘していた。さらに或る歴史的な現象の解明といったことでも、知的協力の必要性が感じられることは多いだろう。

研究者だけがこうした協働に携わるわけではないが、仮に研究者に限ってみても、そのためには知的な共通基盤が必要になる。そして学術書の、一〇〇％専門家ではない、「一回り二回り広い読者」は、部分的な専門性をそうした知的基盤とすることで、知的協働を行える可能性をもつことになる。あえて言えば知識人性をもつことになるのだ。

市民的教養の方は、我々が生きている民主主義的な社会で市民の判断や参加のために必要であることは自明だろう。ただし教養と言えば、文系・古典といったイメージがあるかもしれないが、理系の知を含めて考えるべきである。上の環境問題をみても明らかなように、科学技術の占めるウェイトが大きくなった社会に暮らしている以上、理系的教養の必要な場面が増えていることは間違いないからだ。

市民的教養に関わっては、欧州でテロのあった二〇一五年のモスクワ国際図書展に参加した上村和馬氏が、本誌一〇五号に「未来の愛書家を育てる」という感銘深い文章を寄せているが、こうした、子供を含む市民のお祭りにして他者理解の場である国際ブックフェアにも、我々の学術書は様々な本と並んで出品されている。つまり学術書という書物は、こういうかたちでも読者に開かれており、そのことは市民的教養を広げ、深める支えになっているのである。

学術書が読まれる範囲は、予め決まっているわけではない。それぞれの本が創造していくのであり、コアの専門家の範囲を超え、しかも目の前の社会だけでなくそれを地域

的にも時間的にも超えていく。他の地域や未来の読者にも広がっていくのだ。ただし電子ジャーナルとは違って、あくまで少しずつ、ゆっくりと。そこには翻訳や、読者を育てることも含まれる。それが「情報発信」とは大きく異なる態度であることは理解できよう。そして知識は、こうした読者への回路を決して手放してはいけないと考える。

ただし、学術書だけがよく、ジャーナル論文がダメだ、ということではない。ともに信頼性を担う両者は、互いに補い合う関係にあるはずだ。知識は情報性と作品性のどちらか一方で成り立つものではなかったから、片方だけを強調すればうまくいかない。作品性の強いメディアと、情報性の強いメディアがあっていいし、あった方がいい。すべてのメディアに、両方の要素が含まれていることを忘れず、両者が或る種の緊張をもって補い合うことが大切なのだ。

二つの提言

最後に結論として、冒頭で述べた「大切な要素」を明示しつつ、以上の話を二つの提言にまとめておきたい。

まず第一に我々は、知識の作品性が、情報性とともに十全なかたちをとり、読者に受けとめられるよう媒介し続けなければならない。言い換えれば、知識の作品性を、情報性の名の下に無化していく傾向には、反対の力を働かせ続けなければならない。これは、知識が情報性と作品性を兼ね備えたものであることからすれば当然のことである。

そして第二に、知識の専門性を尊重しつつも、それを社会へと媒介し続けねばならない。言い換えれば、専門的な知識を、狭義の専門家にだけ閉じ込める傾向に対して、反対の力を働かせ続けなければならない。およそ一律には語れない、様々な専門性を尊重しつつ――と言うより、尊重するからこそ、多様な専門性を相互に結びつけるためにも――そうしなければならない。

情報化の進展を否定するのではなく、しかし、そうした流れにただ従うわけでもなく、その中にたえず第一と第二の方向性を確保することで、軌道修正をはかっていくこと、これが現実的な解であり、新たな挑戦を貫くものでなければならない。そしてそれこそ、知識の情報化の進展の下で捉え直された、学術書出版の今日的な意味だと考える。

文献：有田正規「論文数はどれほど重要か」『科学』八〇―八；上村和馬「未来の愛書家を育てる」『大学出版』一〇五号；小林傳司『トランスサイエンスの時代』；H・コリンズ『我々みんなが科学の専門家なのか？』；鈴木哲也／高瀬桃子『学術書を書く』；橘宗吾『学術書の編集者』；橋元博樹「出版流通の変化から見た大学出版の課題」（報告原稿）；長谷川一『出版と知のメディア論』；藤垣裕子『専門知と公共性』；U・ベック『危険社会』；箕輪成男『情報としての出版』；J. A. Evans, “Electronic Publication and the Narrowing of Science and Scholarship,” *Science* 321；他

特集＊出版と知の未来

学術書は「どこでもドア」だ！

増山　修（慶應義塾大学出版会）

書物の森を歩いていると、木の枝々のここそこに、不思議なドアノブが見えてくる。

小さいころの不思議の扉は、こども百科事典だった。ページを開けると、まったく知らない世界の話が次々と現れてくる。今日はどんな話に出会うのだろう。毎回、未知のものに出会うこと、知ることの驚きを楽しみに、気の向くままに分厚い事典をひっくり返していた。

しかし、やがてその興味は特定のテーマへ集中してゆく。そしてたとえば「天文と星座の図鑑」「昆虫の図鑑」などをむさぼるように読むこととなった。幅広い、あてどない知の渉猟というスタイルからは、やや遠のいていった。

高校生のとき、変わった同級生がいた。国語辞典をランダムに開いては、毎日一つ、ことばを暗記していくというのだ。憶えた（とされる）単語はどんどん鉛筆で塗りつぶされていった。英和辞典のページを憶えたそばから破って食べるという話は聞いたことがあるが、国語辞典で似たようなことをやっている奴を見たのは初めてだった。うす黒く手垢にまみれた辞書は、彼にとってどんなファンタジーの扉だったのだろうか。

大学時代の本への向き合い方のほとんどは、履修した科目の課題レポートを書くためにワンテーマ一冊で学術書を読み進めるスタイルだった。所属の経済学部と教職課程のダブルトラックで履修していたため、当然テーマも多岐に亘り、レポートの本数も他人より多かった。

ひたすらレポートを仕上げるという目的を果たすための、直線的な読み方。一冊を読み終えるとすぐ次の一冊へ。わき見や寄り道などしている余裕なんてなかった。

ただ、授業で教授が参考文献として紹介した本のタイトルはほとんどノートの余白に書き留めていたので、あとでそれを図書館で借りて読むことを繰り返し、他の友人たちよりは多くの学術書と接したという記憶はある。実はこの「量を読む」行為こそが、一見メインテーマとは関係ない本がなぜこの授業で取り上げられたのかという謎を解くカギであることに気づくのは、ずっと後のことになるのだが。

社会人になると、まず仕事に必要な知識やノウハウを身に付けるために、とにかく手っ取り早くそれらを吸収するための、いわゆるビジネス書が読書の中心になった。いかにも即物的、目的的な読書スタイルだ。情緒のかけらもない。秘密のドアノブなんて、どこにも見えない。ひたすらにザクザクと克服すべき課題に切り込んでいった。

「本の内容には幅がある」という当たり前のことに気づき、ひとつのテーマについて複数の硬軟さまざまなレベルの本を「ひとかたまり」単位で読むスタイルに切り替えたのは、入社後二、三年経ってからのことだった。ある内容を、ただ手早く習得することだけでなく、もう一歩深く突っ込んで知りたいとか、もう少し味わいながら読んでみたい、と思うようになってきたのだ。そしてだんだん、薄くて簡単に読める入門書、基礎をさっと習得できるテキスト、早読みの新書（中には小品ながらハイレベルのものもあるので、誤解なきょう！）などとともに、並製の解説書から上製の準専門書にまで購読範囲を広げるようになった。

高度な学術書を限られた時間内で読みこなすのは、かなり苦しい。しかし、あるテーマの未知の部分、新しい発見を探求していくには、より深い部分を丁寧に読み込んでいく必要がある。こうして年を経るにつれて、これまでの乱読多読から、ややじっくり型の読書スタイルへと移行し、徐々に専門書にも手を伸ばすようになっていった。

すると、本と向き合う時間の感覚も少しずつ変化していく。これまでの「一冊読む、はい、次！　また一冊読む。はい、その次！」という、競泳プール何十往復的な単調なスタイルから、中仙道の宿場をひとつずつめぐり、途中ちょっと茶屋へ寄り道したり名所を訪ねたり、といった緩やかな道中へと、本に取り組む景色が変化していったのだ。

私は経済書の編集者が生業なので、経済学の専門学術書を繙いてみることにしよう。まず昨今の経済専門書のほとんどが、数式で溢れているという印象をお持ちの方が少なくないようだが、それは極論にすぎる。数理経済学やゲーム論といった特定のジャンルではそうかもしれないが、現代経済学とて、決して数式だらけで読みにくいということはない。私がまず嵌ったのは「脚注（もしくはソデ注）の罠」だ。

専門書の注ですぐ思い出すのは「××（201x）、○○ページ」「△△、前掲書」「同前」といった味気ない補助的なス

タイルだが、どうしてどうして、決してそれだけではない。すぐれた書き手は、本文に示す内容もさることながら、浩瀚な脚注をつけていることがしばしばある。なかにはページのほとんどを注が占めていることもある。急いでいるときには、脚注は飛ばして本文を読み進めるのに専念しがちだが、実はこの注の中に、なんとも味わい深いものが隠れていることがある。

従来、注とは、本文叙述部分が煩雑になるのを避けるために敢えて注として分離しているので、「余談」的な話をここに落とし込むことが往々にしてある。その中で、意外なエピソードや知られざる事実がときとして紛れ込んでいたりする。薄暗い専門的な内容の森をふらつきながら、そんな拾い物に邂逅したとき、なんともいえない心地よい扉を開いた自分に嬉しくもなる。脚注の渉猟はこの「思いがけない何か」と出会う絶好の機会でもあるのだ。

参考文献の森の散策も、あちらこちらに魅力あるドアノブが見え隠れする点では捨てがたい。

たとえば経済成長理論に関する学術書の巻末をそぞろ歩いて「ローマー」という名を見つける。デビッドさんだ。おお、この人が、最近ノーベル賞を受賞した人か。そう思ってカリフォルニアのローマー家のドアを覗くと、どうも受賞者は彼ではないらしい。彼の著書『上級マクロ経済学』（日本評論社）が受賞対象作ではないのか？

慌てて今度は「ノーベル賞」のドアを開けてみる。えっ、受賞者はポール！　別の「ローマー」さんだ。「内生的成長論」の発展に対する貢献、とある。

そこで『上級マクロ経済学』のドアを開け直すと、「新しい成長理論」の章でそれに少しだけ言及されてはいるが、この本はトータルな「内生的成長理論」の解説ではないらしい。

再び「内生的成長」の扉に戻る。ポール氏ではなく、サラ・イ・マーティンという人の別の本が紹介されている。発行元は九州大学出版会だ……。

藤原書店

死とは何か 上下
1300年から現代まで
M・ヴォヴェル　膨大な資料から探究。アナールの「死の歴史」の到達点。立川孝一他訳　各6800円

作ること 使うこと
生活技術の歴史・民族学的研究
A-G・オードリクール　圧倒的博識に基づく「身体・物・技術」の人間学の金字塔。山田慶兒訳　5500円

「琉球文明」の発見
海勢頭 豊　従来の古代史を書き換える問題作。甲骨文字から平和の根源“龍宮神ジュゴン信仰”のルーツを解き明かす。2200円

地域の医療はどう変わるか
日仏比較の視点から
Ph・モッセ「病院中心主義」からの脱却に向け、フランスから何を学ぶか。原山哲・山下りえ子訳　2800円

「雪風」に乗った少年
十五歳で出征した「海軍特別年少兵」
西崎信夫　「武蔵」「信濃」「大和」沈没を目撃した少年の“生き抜く力”。　小川万海子編　2700円

中村桂子コレクション いのち愛づる生命誌　発刊
全8巻（年4回刊）　内容見本呈
推薦＝加古里子　髙村薫　舘野泉　松居直　養老孟司
5 あそぶ―12歳の生命誌
細胞、DNAは全ての生きものに共通する。異なり、つながる「いのち」の世界をやさしく語る、珠玉のコレクション。　解説＝養老孟司　［第1回配本］2200円

月刊 機　B6変32頁　2月号　No.323
山田慶兒／山田登世子／今福龍太／井口時男／門田眞知子／木村汎／海勢頭豊／加藤晴久／中西進／中村桂子／槇佐知子 ほか
年間購読料2000円（送料込）　◎見本誌・ブックガイド呈　＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013　TEL 03-5272-0301
ホームページhttp://www.fujiwara-shoten.co.jp/

あっちへうろうろ、こっちをうろうろ。どうやら今回は、アメリカから北欧経由で、福岡にいたる道を辿ってしまったようだ。

連鎖が連鎖を呼ぶ。ローマーついでに、クリスティーナ・ローマーさんの庭先にも立ち寄ってみる。彼女はデビッド氏の妻で、米大統領経済諮問委員会の委員長にもなっている、超一流の学者だ。なんてすごい夫婦だ！

……そういえば、すごいカップルがもう一組あったな。ジャネット・イエレン元連邦準備理事会議長と、ジョージ・アカロフ教授（情報の経済学でノーベル賞受賞）だ。えっ、レモン市場？　なんだこれは。……レモン、レモンと、また次の回り道に歩を進めると、『レモンをお金にかえる法』という本に突き当たる……。こんな調子で、異空間の迷路から、いつまで経っても抜け出せなくなっていく。このように長く曲がりくねった道の散歩を毎晩のように繰り返していては、仕事は破綻します。本当に。

注や参考文献ばかりがファンタジーゾーンではない。もちろん、多くの学術書の本文も、魅力に満ち溢れている。要は、本のどのあたりで好奇心のドアノブを見つけ、その中に飛び込む機会を見出すか、ということではないだろうか。そして、ドアを開けるには、少し勇気も要るが、ある程度の心の余裕も大切だと思う。

それについて、一つ思い出すことばがある。もうずいぶん前、大学生になって間もないときに、フランス文学者ながら慶應義塾大学の経済学部長を務められた永戸多喜雄教授からうかがったことばだ。

「大学生活の四年という期間は短い。だから、ほとんどの人は、その間にできるだけ効率よく何かを仕上げようと、単線的な生き方をする。一方、社会に出たら、学生生活のようなゆとりある時間は、そうそう持てません。学生諸君は、大学在学中に、敢えて『前進のためには、ときには迂回することも必要だ』ということにも思いを馳せてほしいと願います」

もうひとつ、印象深い「教え」（というか、啓発）を受けたことばがある。財政学者だが、一方で『超整理法』などのベストセラーを著された野口悠紀雄教授のことばだ。

野口先生には『超勉強法』という著作もある。教授がこれを書かれたきっかけが、ゆとり教育の方針に対する不信感だったそうだ。

先生の持論として、ものを考え洞察するには、最低限の基礎知識が、絶対に必要である。にもかかわらず、ゆとり教育の方針は、こどもの記憶力が最も発達する時期に、基礎知識を憶えることを「しないでよい」と指導する、本末転倒の愚策である。基礎がないところで、なにを元に論理を構築せよというのだ！

「ゼロに何を掛けてもゼロにしかならないのです。しかるべき年齢のときに最低限必要なことは、まず憶えること。これなくしてその後の思考展開など、ありえない！」

後年これらのことばを思い出し、はたと気づいた――そうか、私は一応、学生のとき、そして社会人駆け出しのときに、本の多読という、我武者羅に知識を詰め込む訓練を行ってきた。それがいま、巡り巡って仕事の上で活きてきているのか。

そして、この疑問も氷解した。国際経済学の授業で、なぜ、突然教授がヘディンの『さまよえる湖』を参考文献として挙げたのか、その理由も。

学術書の、表面にあらわれた部分は、いわば氷山の一角であり、読み手は水面下に隠れた無限の小宇宙をどう旅するか。自分なりに自由自在に異空間を飛び回るのを楽しんでこそ、高い金額を払ってその一冊を買った甲斐があるのではないだろうか。

編集者という職業は、かなり寄り道・回り道の多い道のりを歩く人生なのかもしれない。その寄り道の先々で、次はどんな「どこでもドア」にめぐり会えるのだろう。

明日も、書林（書店）に行くのが楽しみだ。

基本刑法Ⅰ
――総論［第3版］
大塚裕史・十河太朗・塩谷　毅・豊田兼彦［著］
絶大な人気を誇る定番の教科書。法改正・新判例を踏まえ、さらに明快にバージョンアップ。「正当防衛」「実行の着手」「共犯」は全面改訂。
■3,800円＋税

民事訴訟法
瀬木比呂志［著］
圧倒的なわかりやすさ!
理論と実務の重要論点を網羅し、正確、明解に解説。学生から弁護士まで、「使える民訴教科書」決定版! ■5,000円＋税

イノベーションと技術変化の経済学
岡田羊祐［著］
日本におけるイノベーションの特徴と実証分析の方法論、イノベーション・マネジメントの課題について、幅広く鳥瞰する。
■2,800円＋税

数学スキャンダル
テオニ・パパス［著］
熊原啓作［訳］
数学はどのように生まれてきたのか。数学を生みだした数学者達の人間性に着目し、フィクションと歴史的事実を織り交ぜて紹介する。■1,800円＋税

AIにできること、できないこと
藤本浩司・柴原一友［著］
AI、そこが知りたかった!
現在のAI技術では何ができて何ができないのか、その実態を技術者がやさしく語る。実際にAIをビジネスで活用している事例も紹介。■2,000円＋税

日本評論社
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 https://www.nippyo.co.jp/

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

事務局／一月の業務

八日　『大学出版部協会の歩み　二〇一三－二〇一八年』の加盟出版部への配送をとりまとめる。

九日　賛助会員社の名簿順に冊子の献送を始める。

一〇日　「大学出版・新刊速報発送リスト」の修正＆アップロードを行う。私立大学長、韓国大学出版協会など五件。引き続き賛助会員社に冊子を送る。

一一日　賛助会員社への冊子送付を終了。続いて加盟出版部の送付を開始。総数四八〇部。

一四日　関西の加盟出版部より協会ホームページのＵＲＬ変更連絡があり、事務局で訂正作業を行う。

一六日　加盟出版部へ冊子送付が続く。第六回理事会開催案内を、前回議事録（案）とともに添付ファイルで送る。新刊速報リストの宛名修正作業。大学長、新聞社など七件。

二一日　昨年七月に日韓セミナーと夏季研修会を開催してお世話になった福岡のホテルの在京担当者が異動の挨拶に来られる。

二三日　全国図書館向けの委託送本に使う特製青短冊五〇〇枚を、注文のあった加盟出版部に送る。

二五日　駒場の東京大学出版会会議室で第六回理事会が開催される。

三一日　協会発行のブックレット『心の多様性』を都内書店から電話注文があり、発売元の東大出版会に連絡する。

次代に引き継ぐものとして

平成元年は協会の創立二五周年をむかえた年で、このときは「豊かさとは何か」などと題された連続記念講演会が各地で開催された。思えば平成という時代は出版界が繁栄の坂を上りつめたあとに、一転おちていく構図だった。この概念の基になっているのは、よく言われる「出版物推定販売額」で、今年も前年比三・二％減の一兆五四〇〇億円という数字が公表された。最近になって電子物が加えられたものの、ここには直販などの実績が抜け落ちており、出版実態の下り勾配は巷間言われるよりは緩やかではないかと想像している。行政府が犯した勤労の統計不正がいま問題になっているが、専門家によると国勢調査など全数調査以外の統計は基本的に推計値であるという。坩堝のような出版実態を精確に把握することは容易ではないが、とにかく希望を持ちましょう。この先どのような時代が私たちを待ち受けるのか、本誌の発行日四月一日に新元号が発表される。

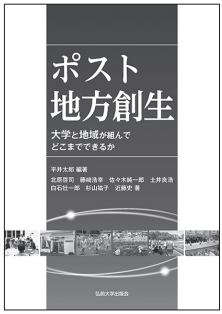
北海道大学出版会

▼藪野祐三著『**現代日本政治講義―自民党政権を中心として**』（四六判・二四六頁・二四〇〇円）自民党はなぜ時代の変化を乗り越え長期政権を維持できたのか。政権交代、政党、政策、有権者、外交という切り口からその「秘密」を機能的・構造的に明らかにする。自民党を中心に、一九五五年以降現在にいたるまでの日本政治をわかりやすく包括的に論ずる、藪野政治学の入門書。

▼近久武美著『**新しいエネルギー社会への挑戦―原発との別れ**』（四六判・一八八頁・二四〇〇円）われわれは子どもたちに安心できる環境を残すために何ができるか？　それは自然エネルギーによる社会形成は十分に可能であり、さらに経済活性化にもつながることを理解することである。本書では、地球温暖化の危機的状況とそのメカニズム、容易に生じる貧富格差の理由、失業率と自殺率の相関から見た幸福論、社会コストと温室効果ガス低減に対する最適エネルギー構成、競争がますます激化している現代社会の間違いと教育の重要性などについて、一般読者にわかりやすく解説している。

弘前大学出版会

▼平井太郎編著『**ポスト地方創生　大学と地域が組んでどこまでできるか**』（A5判・二〇四頁・一四〇〇円）「持続可能な地域の未来」をキーワードに、弘前大学の都市計画、農村計画学、経営学、地域計画学、人類学、社会学の研究者達が、地域の方と共に挑戦した軌跡をまとめた。数年にわたる研究の成果や強みを生かし、地域の未来を導く方法について明らかにする。地域のこれからに不安を覚える、地域のために何かやりたいすべての方に必読の書。



▼ＲＥＭ編集委員会編『**Radiation Environment and Medicine**』Ａ４変形判・三八頁・一一〇〇円）第八巻一号には、放射線計測、放射線治療、被ばく医療教育、リスクコミュニケイション等の六報の論文が掲載されている。

東北大学出版会

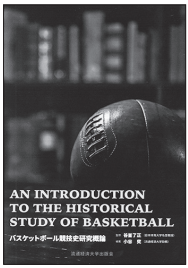
▼東北大学教養教育院編『**東北大学教養教育院叢書「大学と教養」第一巻　教養と学問**』（Ａ５判・二二〇頁・二五〇〇円）叢書「大学と教養」の第一巻。第一部では教養教育の歴史やその実践過程を大学の制度設計の中で振り返り、第二部では専門教育との関係を研究者たちが語る。教養の意味を問い直し、これからの時代に求められる教養の意義を模索する横断的な議論の論考集。執筆者：木島明博（海洋生物学）、浅川照夫（英語学）、柳父圀近（西洋政治思想史）ほか。

▼東北大学教養教育院編『**東北大学教養教育院叢書「大学と教養」第二巻　震災からの問い**』（Ａ５判・二二四頁・二五〇〇円）叢書「大学と教養」の第二巻。第一部では東日本大震災が大学に問うたことを科学技術や教養教育の視点から浮き彫りにし、第二部では複数の専門知をとおして教養がなすべき役割を照射する。震災からの問いを受けとめる「教養の力」を被災地から発信する。執筆者：花輪公雄（海洋物理学）、森田康夫（数学）、野家啓一（科学哲学）、小林隆（方言学）、座小田豊（西洋近代哲学）ほか。

流通経済大学出版会

▼ドイツ連邦共和国交通省編・杉山雅洋監修・中田勉訳著『**アウトバーンの歴史―その前史から二十一世紀まで―**』（A5判・四一〇頁・三三〇〇円）ドイツのアウトバーン建設前史から現在に至るまでの経緯を取り扱っており、高速道路に関心のある方に広く読んで頂きたい一冊。

▼谷釜了正監修・小谷究編著『**バスケットボール競技史研究概論**』（A5判・一六〇頁・一三〇〇円）「バスケットボール競技史」に固有の学問性を特定し、日本を対象としたバスケットボール競技史研究の方法論を解説するための一冊。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・藪中征代・古川寿子・古川由紀子・川並珠緒・東川則子著『**言葉の発達を支える保育**』（B5判・一三四頁・一六〇〇円）

言語の発達と人間関係について、事例をあげながら解説。

▼川並知子著『**こどもとつくる　おりがみえほん　あかずきん　グリム童話**』（B5判ヨコ・四四頁・一五〇〇円）

おりがみが織り成す新しいグリム童話。

▼塩美佐枝・古川寿子・川並珠緒・関口明子・羽生和夫著『**幼児理解と一人ひとりに応じた指導**』（B5判・一二〇頁・一五〇〇円）

幼児理解と指導について網羅した一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『**一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援［改訂版］**』（A5判・二一八頁・一五二八円）

初学者のための特別支援教育本。

▼川並知子・広瀬知里著『**子どもと親のためのおりがみアイディア**』（B5判・一二八頁・一五〇〇円）

幼児から大人まで楽しめるおりがみ遊び本。

慶應義塾大学出版会

▼トニー・ジャット著／ジェニファー・ホーマンズ編／河野真太郎他訳『**真実が揺らぐ時―ベルリンの壁崩壊から9・11まで**』（四六判・五六〇頁・五五〇〇円）真実を追い求めよ。飽くことなく事実と真実を追究した知識人、トニー・ジャット。ニューヨークに居を移し、難病と闘いながら、彼は最後に何を語ったのか。

▼井庭崇編『**クリエイティブ・ラーニング―創造社会の学びと教育**』（四六判・六七二頁・三六〇〇円）クリエイティブ・ラーニングによって、私たちはどのような未来をつくることができるのか？子どもたちの創造力を育む、クリエイティブ・ラーニングの可能性について、気鋭の研究者・井庭崇が、鈴木寛、岩瀬直樹、今井むつみ、市川力という教育界のフロントランナーを迎え、徹底討論。

▼朝田佳尚『**監視カメラと閉鎖する共同体―敵対性と排除の社会学**』（A5判・二〇八頁・四〇〇〇円）異物を敵視し、不安に揺れる私たち。なぜ監視カメラの急速な拡大が生じたのか。誰がその設置活動を担ったのか。日本社会の監視化の実態を鋭く捉えなおす力作。

専修大学出版局

▼吉田雅彦著『**日本における中堅・中小企業のオープンイノベーションとその支援組織の考察―人的ネットワークの観点から**』（A5判・二四二頁・二三〇〇円）中堅・中小企業の産学官連携によるオープンイノベーションの現状と課題、支援組織がその期待される役割を果たすために必要な条件は何かをケーススタディに基づいて考察する。

▼孫維維著『**中国におけるドラッグストア発展のダイナミクス―薬店と薬粧店を中心に**』（A5判・一八〇頁・二四〇〇円）急速に発展する中国のドラッグストア業界について、その先進国であるアメリカや日本と比較・研究し、今後の方向性を考察する。また中国既存の薬店と薬粧店を体系的に整理して、代表的企業の事例研究を進め、発展要因を分析する。

▼専修大学今村法律研究室編『**神兵隊事件　別巻七**』（A5判・三六八頁・五二〇〇円）昭和八年七月のクーデター未遂事件の資料集。神兵隊事件被告人訊問調書写・予審第一号室備付のうち神兵隊事件被告人訊問調書写（被告人・影山正治）を収録。

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『**地域人**』（A4判・平均一四四頁・一〇〇〇円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視覚から紹介する地域情報満載の総合情報誌。

地域特集では、現地取材をもとに、物事を経済的視点だけから見るのではなく、多様な文化、歴史、暮らしに至るまでを掘り起すことを目指している。一方で、地域創生とは何かを豪華連載人による、人口、産業、食文化、リノベーション、ふるさとと信仰など、社会から心の問題まで幅広い提言を毎号掲載する。

第四二号　特集―図書館とまちづくり／Part1融合する図書館（あかし市民図書館　他）／PArt2発信する図書館（甲州市立勝沼図書館　他）／Part3共創する図書館（伊万里市民図書館　他）他

玉川大学出版部

▼石橋哲成・佐久間裕之編著『**西洋教育史 新訂版**』（A5判・二四八頁・二四〇〇円）西洋の教育思想と教育実践とを人物からとらえ、現代に至る流れを学ぶ入門書。イギリス、ドイツ、フランス、アメリカを中心に、教育のはじまりから第二次世界大戦後までを押さえた、充実の内容。巻末には、西洋の教育史を一覧する年表、索引を付す。

▼秋道智彌著『**たたきの人類史**』（四六判・四三二頁・四五〇〇円）たたく行為は、人間の進化の過程でどのような役割と意味をもってきたのか――。食文化、樹皮布、製紙、土器、武器、スポーツ、楽器、彫刻……。先史時代から現代まで、世界各地域におよぶ「たたき技術」を網羅。時空を超えた思索の試み。

▼筒江薫編『**民俗学者・野本寛一　まなびの旅**』（A5判・一五二頁・二二〇〇円）環境民俗学を切り拓き、平成二十七年度に民俗学・地方文化振興の文化功労者として顕彰された野本寛一。本人曰く「民俗学を鈍重につづける地味な学徒」が、子ども時代から高校教師時代、学問との向き合い方、印象深い旅の数々を語る。

中央大学出版部

▼野口薫著『**愛と対話が開く宇宙―ゲーテ『西東詩集』研究「ズライカの巻」を中心に**』（A5判・三六〇頁・三六〇〇円）六〇代半ばのゲーテは、一四世紀ペルシャの詩人ハーフィスの詩との出会い、東洋への想像上の旅、老年の恋と諦念を通じて、叙情詩集『西東詩集』を生んだ。本書は実証的ゲーテ研究を踏まえつつも詩を詩として、詩集を詩集として読み味わうことを目指す試みを通して、索漠として生きにくい時代を人間として「生きる」智慧を読み取ろうとする。

▼齋藤道彦著『**南シナ海問題総論**』（中央大学学術図書97）（A5判・三六四頁・三六〇〇円）本書は、「南シナ海は古来中国のものだ」という主張に根拠がないことを明らかにし、「中国が発見し、命名した」という主張も根拠がなく、ヨーロッパが命名したことを明らかにし、九段線主張の根拠も日本の東アジア太平洋戦争中の南シナ海領有に起因していること、解決は国際的裁判所に委ねるべきだという主張も、中国が拒否している事実を述べている。正しい認識を広め、包囲することが必要なのだ。

東京大学出版会

▼野間秀樹著『**言語存在論**』（A5判・四三六頁・五五〇〇円）言語を根源から問い直すために、談話論やテクスト論、文字論などの既存の言語学とその境界を越えた視座から新たな知を拓く原理論。

▼小林康夫・中島隆博著『**日本を解き放つ**』（四六判・四二四頁・三二〇〇円）二人の哲学者が、〈ことば〉〈からだ〉〈こころ〉にまつわる重要テクストを読み解きながら、日本の条件と可能性を語る。

▼木下直之著『**動物園巡礼**』（四六判・三〇八頁・二八〇〇円）動物園に動物園を見に行こう。一体何をしに？　通天閣とサバンナとサイ、別府地獄のカバとワニ、大須観音商店街のラクダ行列…。行く先々の風景からヒトと動物との関係が見えてくる。地図を持たない巡礼の旅。

▼三浦慎悟著『**動物と人間―関係史の生物学**』（B5判・八四二頁・二〇〇〇円）ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、そしてアジアで、人間は野生動物、産業動物、伴侶動物などとともにどのような歴史を歩んできたのか。先史時代から現代まで、ミツバチからクジラまで、動物と人間の関係を描き上げた壮大な物語。

東京電機大学出版局

▼東京電機大学編『**新版　電気基礎　上―直流回路・電気磁気・基本交流回路**』（A5判・二八〇頁・二七〇〇円）初版刊行から二五年にわたり毎年数多くの読者に支持されてきた本書。最新JIS規格への見直しと、デジタル計測器の説明、演習問題の充実をはかった。電気および電子工学の技術を学ぶために必要な電気磁気と電気回路を上下巻に分けて刊行。上巻では、直流回路、電気磁気、基本交流回路について解説している。理解しやすさと学びやすさに重点をおいてまとめた。これから電気を学ぼうとする方の入門書として最適。

▼東京電機大学編『**新版　電気基礎　下―交流回路・基本電気計測**』（A5判・二六四頁・二七〇〇円）下巻では、交流回路、基本電気計測について解説している。電験の試験対策にもおすすめの一冊。

▼土肥健純監修『**医用工学の基礎**』（B5判・二三二頁・二九〇〇円）医用工学分野（生体磁気、生体計測、治療機器、福祉機器、再生医療）を体系的に学べる教科書。医用工学分野の基礎と新知見を併せもつ入門書。

法政大学出版局

▼前田佳一編『**固有名の詩学**』（A5判・三一六頁・六四〇〇円）現実と虚構は固有名を介して接続され人々を未踏の地平へと誘う。中世から現代までのドイツ語圏文学における固有名の機能を産出性・虚構性・否定性のもとに解明する。

▼江川隆男著『**スピノザ『エチカ』講義―批判と創造の思考のために**』（A5判・四〇六頁・五〇〇〇円）『エチカ』は現代に生きる人々が生きる上での指針の書にほかならない。強い推進力で一気に読ませる著者待望のスピノザ論！

▼川瀬雅也著『**生の現象学とは何か―ミシェル・アンリと木村敏のクロスオーバー**』（A5判・三四二頁・三七〇〇円）感覚、時間、身体、自己といった歴史的論点をときほぐす、新しい現象学入門。

▼ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編著『**〈ポスト3・11〉メディア言説再考**』（A5判・三八〇頁・四六〇〇円）東日本大震災でむき出しになった不条理や矛盾は、日本の文化にどのような変化を与えたのか。哲学や文学、映像学等の多様な分野の専門家による共同研究の成果。

武蔵野大学出版会

▼阿部和穂著『**認知症 もっと知りたいこと99**』（A5判・二二四頁・一六〇〇円）●アルツハイマー病を発症する人としない人の違いは？●使用可能になりそうな認知症の新薬はある？●「歯周病」が「アルツハイマー病」の原因？●緑茶は認知症予防になる？●睡眠薬を使っていると認知症になりやすい？●タバコは認知症の危険因子？　認知症99の疑問を薬学部の教授がQ&A形式で解説する。

▼矢内秋生著『**アドリア海の風 〜風土的環境観の調査研究**』（A5判・二九二頁・二八〇〇円）「アドリア海の風」をもとに、気象学的なメカニズムはもちろん、地域語の数々と使われ方、共有されているストーリーから、自然現象と共生する人々、自然現象、環境全般、世界観を解説する。

武蔵野美術大学出版局

▼高橋陽一編『**総合学習とアート**』（A5判・二五六頁・二〇〇〇円）新学習指導要領に対応。小・中学校の「総合的な学習の時間」、高等学校の「総合的な探究の時間」を指導する教師のために、理論と歴史解説、教室で活かせる事例をまとめた技法書。「表現」を眼目とする美術の教員こそ、教科の垣根を越えて他の教員と手を携え、すべての子どもたちが主人公となるような主体的で対話的な学びを担うことができる。

▼高橋陽一著『**ファシリテーションの技法　アクティブ・ラーニング時代の造形ワークショップ**』（A5判・二四〇頁・二二〇〇円）本来のワークショップの意味、歴史を踏まえ、学校教育における「手法としてのワークショップ」を明確にし、ファシリテータに必要な企画力、組織力、記録力を具体的に提示。章ごとに「キーワード」「要約」を掲げ、過去の授業でのQ&A、討議用の課題、参考手法等を加え、どんな現場でもすぐに応用可能な技法を伝授。

明星大学出版部

▼吉冨芳正・菱山覚一郎編『**教科外活動の未来を拓く　特別活動と総合的な学習の時間の世界**』（A5・二二二頁・二〇〇〇円）現在の学校では「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。ここで必要となるのが、教科外活動の充実である。本書はこのために教師に必要な資質・能力の育成という観点から、教科外活動の意義やあり方を整理している。

▼髙橋和子・佐藤玲子・伊藤摂子『**小学校教員を目指す人のための外国語（英語）教育の基礎**』（B5・一一六頁・二四〇〇円）小学校英語指導者に求められる英語力を身につけ指導力を養うためのテキスト。ある小学校における低・中・高学年の授業を想定し英語授業の基本的な流れが理解できるように構成。基礎的な音声の聞き取り・発音練習にも対応している。

▼吉冨芳正編『**現代教育課程入門**』（A5・四〇〇頁・二二〇〇円）教育活動全体の質を高める上で重要な役割を果たすのが教育課程。この教育課程をはじめて学習する方、或いは改めて学び直したい方を対象に教育課程の意義、歴史、新学習指導要領の考え方や改善事項を学ぶ。

早稲田大学出版部

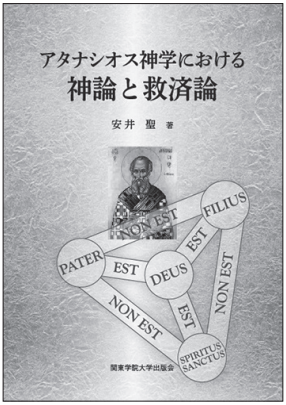
▼堀内俊洋著『**産業組織研究**』（A5版・四九四頁・五〇〇〇円）この国の経済と社会は強い力を持っている――。いまだ続く、日本の低成長・低インフレ。この困難な局面を打開するヒントを企業の活動および政府の政策に探る。産業組織論の第一人者による研究成果の集大成。

▼鄭東俊著『**古代東アジアにおける法制度受容の研究**』（A5判・二八八頁・四〇〇〇円）東アジアにおける朝鮮三国（高句麗・百済・新羅）の役割に注目し、その文化要素のうち、特に法制度を対象に、朝鮮三国に対する中国王朝の影響を分析・検討する。従来の中国王朝を中心とした律令研究に新たな視点を与える。

関東学院大学出版会

▼安井聖著『**アタナシオス神学における神論と救済論**』（A5判・三三〇頁・三四〇〇円）ローマ帝国の迫害下にあったキリスト教会の立場は、紀元四世紀に大きく変わり、帝国の国教となっていった。この激動の時代に組織的指導者として教会を導いたアタナシオスは、同時に「三位一体論」の成立のために多大な影響を与えた思想的指導者でもあった。本書は、そんなアタナシオス神学の特質を解明する、わが国における稀有な著作である。

〈目次〉序論　本研究の目的と方法／第1部　アタナシオスにおける神の善性の理解／第2部　アタナシオスの救済論／結論　アタナシオス神学における神論と救済論の関係



東海大学出版部

▼九州両生爬虫類研究会編『**九州・奄美・沖縄の両生爬虫類―カエルやヘビのことをもっと知ろう**』（A5判・二六四頁・二四〇〇円）九州本島・奄美・沖縄の多様な環境の中、たくましく生きる両生爬虫類を四十七名の著者が紹介する。

▼浅野恵子・中野重雄・佐藤努『**様々な分析手法からとらえた音声の生成と知覚**』（A5判・一六八頁・四五〇〇円）英語音声学の概要を、典型的な内容から最近の研究までを交え学習者の理解を高める指南書の一冊。

▼武田昌之『**戦争・平和・国家組織―歴史的に考える**』（A5判・二五六頁・六八〇〇円）ブルンチュリ、シュッキング、ヴェーベルク…国際法学者の国際組織構想や平和主義者の兵役と兵役拒否に対する見解を通して、近代の戦争と平和の常識を相対化し、日本国憲法第九条第二項の歴史的な意味を考える。

名古屋大学出版会

▼松井裕美著『**キュビスム芸術史―二〇世紀西洋美術と新しい〈現実〉**』（A5判・六九二頁・六八〇〇円）造形・理論における多面的かつ国際的な拡がりをもつキュビスム。「幾何学」的表現の誕生・深化から、第二次世界大戦後の歴史的評価の確立までを、美術と〈現実〉との関係を軸に描ききる挑戦的通史。

▼林采成著『**飲食朝鮮―帝国の中の「食」経済史**』（A5判・三八八頁・五四〇〇円）牛肉、明太子、ビールなど、帝国による「食」の再編は日韓の食文化を大きく変えた。収奪論をこえて、帝国のフードシステムの歴史的意義を初めてトータルに解明、帝国の統治にはたした「食」の役割を浮かび上がらせる。

▼ウォラック&アレン／岡本慎平・久木田水生訳『**ロボットに倫理を教える―モラル・マシーン**』（A5判・三八八頁・四五〇〇円）間近に迫る倫理的な機械の必要性を、哲学的背景も含め明確に提示。実現に向けた種々の工学的アプローチを概観し、困難ではあるが避けがたい取り組みのこれからを展望する。AIは道徳的になれるのか？

名古屋外国語大学出版会

四月発売　新刊情報

▼亀山郁夫・野谷文昭編訳『**世界文学の小宇宙1　欧米・ロシア編　悪魔にもらった眼鏡**』（四六判・四〇〇頁・二〇〇〇円）

六つの言語で書かれた十二の物語。亀山郁夫と野谷文昭の奇跡のコラボレーションが生んだ、悦楽の文学館。コリンズ、H・ジェイムズなどの「初訳」を含む。

▼浅野輝子・吉見かおる編著『**世界のトピックで学ぶ　通訳ワークブック**』（A4判・二八二頁・二五〇〇円）

名古屋外国語大学で毎年開催されている、大好評の「全国学生通訳コンテスト」。そのエッセンスをまとめた、待望の本。通訳教育・通訳クラスでの教材として、長年刊行が待たれていたワークブック。

▼川原功司著『**英語コアカリキュラム対応　英語の諸相―音声・歴史・現状**』（A5判・二四〇頁・一二〇〇円）

英語教員免許の取得をめざす人など、英語コアカリキュラムにおける「英語学」学習のための最適なテキスト。音声学、音韻論、発音記号……軽視される風潮にあった英語の「音」の基礎部分を理解し、手軽に学ぶために。

三重大学出版会

▼宮崎照雄著『**女王卑弥呼が都した邪馬台国に到る**』（四六判・上製・二七三頁・二〇〇〇円）

海洋生物学者による邪馬台国の争点化。卑弥呼の邪馬台国は今の壱岐から北九州を東から西に向かって放射状に海里・陸行の説明を受ける魏使の立場から聞き取ると、合理的な配列になる。

口絵　緒言
第一章　魏の返礼遣使団の来訪
第二章　「順次読み」の筆法
第三章　「南至邪馬壹国女王之所都水行十日陸行一日」
第四章　「邪馬壹（臺）國」を考える
第五章　「邪馬臺國」へのアプローチ
第六章　「邪馬臺國」はここだ！
第七章　黒歯国はどこか？
第八章　「自郡至女王國萬二千餘里」・「計其道里當在會稽東治之東」
第九章　「計其道里當在會稽東治之東」と邪馬台国在近畿説
第十章　「南至投馬國水行二十日」
第十一章　『魏志』倭人伝の一誤植を諒解すれば、邪馬台国に確実に到れる
巻二　「卑彌呼以死」（目次を略）

京都大学学術出版会

▼小池登・佐藤昇・木原志乃編『**『英雄伝』の挑戦―新たなプルタルコス像に迫る**』（A5判・三五六頁・四五〇〇円）

長く愛読されながら、学術的価値を疑問視されてきた『英雄伝』に、哲・史・文の分野から迫った新研究。「伝記」という新たなジャンルを開拓し、旧来の形式を打ち破った、新たなプルタルコス像。

▼門脇浩明・立木佑弥編『**遺伝子・多様性・循環の科学―生態学の領域統合へ**』（A5判・四三八頁・三七〇〇円）自己複製の担い手たる遺伝子は、生命の多様性を育て、その多様性が物質とエネルギーの流れを生み出す。そして出来上がった自然が、新たな生命の揺籠となる。遺伝子と生態系をつなぐ自然原理を目指し、生態学者の新たな挑戦が幕を開ける。

▼ケイトリン・コーカー著『**暗黒舞踏の身体経験―アフェクトと生成の人類学**』（A5判、二九六頁・三二〇〇円）暗黒舞踏は何故に人を揺るがすのか？　物質としての肉体そのものからあふれ出るパワーが生み出す相互作用の秘密を、研究者自らの身体を通して分析する新しい人類学。

大阪大学出版会

▼都出比呂志著『**古墳時代に魅せられて**』（四六判・二三二頁・一七〇〇円）遺跡を直接見てその地に立ち過去から現代へ流れる時間・空間を体感し、自分の国や世界を認識する。

▼内野花著『**日本を彩る香りの記憶**』（四六判・二二六頁・一六〇〇円）歴史上の人物、文学のなかの人々が、生活のなかで欠かせなかった香りを、いかに駆使してさまざまなシーンを彩ってきたのか。

▼老松克博著『**心と身体のあいだ―ユング派の類心的イマジネーションが開く視界**』（四六判・二〇八頁・一九〇〇円）ユング派精神科医がアクティヴ・イマジネーションやボディーワークで解き明かす類心的無意識と心身症、発達障害のメカニズム。

▼清水康次著『**『羅生門』の世界と芥川文学**』（四六判・二四〇頁・二〇〇〇円）芥川はなぜ早々と完成度の高い作品「羅生門」を作ることができたのか。当時の状況と先行文学の影響力を明らかにする。

関西大学出版部

▼髙作正博著『**米軍基地問題の基層と表層**』（A5判・四五〇頁・三〇〇〇円）沖縄の米軍基地に「抗う」運動は、「民意」と「歴史」に支えられている。米軍基地から派生する様々な問題を、その直接の原因である日米地位協定や国内法、また、その底流で流れ続ける「改憲論」の観点から問い直す。米軍基地問題を日本国内の問題として捉え、その解決のための視座を、主権論や国家論に求める。

▼孝忠延夫・浅野宣之著『**インドの憲法〔新版〕**』（A5判・三五六頁・三二〇〇円）国民国家のあり方が問われる今、二九の州と七の連邦直轄領から成るインドは、その憲法で二二の公用語を定め、「多様性のなかの統一」をめざしてきた国として知られている。本書は、インドの基本的あり方を詳細に規定するインド憲法を紹介・分析し、その全文和訳（二〇一六年第一〇一次改正までを含む）を行う。

関西学院大学出版会

▼中野順哉著『**うたかた―七代目鶴澤寛治が見た文楽**』（四六判・一一二頁・一五〇〇円）人間国宝七代目鶴澤寛治の語る文楽の歴史。

▼深尾裕造編著『**マグナ・カルタの800年―マグナ・カルタ神話論を越えて**』（A5判・二二四頁・三五〇〇円）制定後の解釈の歴史と我が国への影響。

▼植戸貴子著『**知的障害児・者の社会的ケアへ―「脱親」のためのソーシャルワーク**』（A5判・二三〇頁・四二〇〇円）母親によるケアから社会的ケアへの相談支援。

▼Kevin Heffernan著『**The Grammar of Kansai Vernacular Japanese**』（A5判・一七四頁・一九〇〇円）関西弁を学びたい外国人の方へ。

▼神野直彦・山本隆・山本惠子編著『**貧困プログラム―行財政計画の視点から**』（A5判・二五六頁・二六〇〇円）

▼宮田由紀夫著『**アメリカにおける国家安全保障と大学**』（A5判・二四六頁・二六〇〇円）

広島大学出版会

▼広島大学次世代エネルギープロジェクト研究センター編『**身近なエネルギー利用のしくみ**』（四六判・一二五頁・七九〇円）広島大学のオープンキャンパスで高校生アンケートによって選ばれた一三の機器について、工学的な説明を加えた教養書。二〇一二年刊。

▼衛藤吉則著『**西晋一郎の思想―広島から「平和・和解」を問う**』（A5判・二〇七頁・二九〇〇円）西の思想を、戦前における東西の思想的蓄積と発展のうちに位置づけ直し、「平和・和解」理論としての可能性を問う。二〇一八年刊。

▼寺垣内政一著『**平面幾何の公理的構築**』（A5判・一四四頁・八九〇円）本書では、平面幾何を公理的に構築する。日本の初等・中等教育における幾何内容は、直感的な理解に頼っている。小学生にはこれで十分としても、中学・高校において命題の証明を行う際には不都合が生じる。集合論の基本的な知識だけを用いて、ユークリッド幾何と非ユークリッド幾何を同時に構築する。現職の教員や教員志望の学生には特に知っておいてもらいたい内容。（三月発売予定）

九州大学出版会

▼小笠原弘幸編『**トルコ共和国 国民の創成とその変容―アタテュルクとエルドアンのはざまで**』（A5判・三二四頁・四八〇〇円）
▼遠藤歩著『**和解論**』（A5判・五〇八頁・六〇〇〇円）
▼熊谷圭知著『**パプアニューギニアの「場所」の物語―動態地誌とフィールドワーク**』（A5判・五六〇頁・七四〇〇円）
▼野村優子著『**日本の近代美術とドイツ―『スバル』『白樺』『月映』をめぐって（九州大学人文学叢書14）**』（A5判・二六六頁・四〇〇〇円）
▼大浜聖香子著『**12-13世紀におけるポンティウ伯の中規模領邦統治（九州大学人文学叢書15）**』（A5判・二四二頁・四二〇〇円）
▼永松美保著『**マーガレット・ドラブル文学を読む―リアリズム小説から実験小説へ**』（A5判・二一八頁・四八〇〇円）
▼水永秀樹著『**はじめの一歩　物理探査学入門**』（A5判・三六〇頁・三六〇〇円）

編集後記

本誌『大学出版』九八号（二〇一四年四月一日）～一一八号（二〇一九年四月一日）まで五年二一号にわたり、私と玉川大学出版部の森貴志さんが編集を担当して参りましたが、本号をもって両名とも退任いたします。この間、奇数号を森さんが、偶数号を私が担当いたしました。

各号の特集を組む際、森さん担当の奇数号とのバランスに多少は配慮しましたが、基本的には学術書の編集者としての自分が、その時その時に、関心を抱いていた問題について特集を組みました。今から振り返ると、大きく分けて二つの事柄に特に執着していたことがわかります。

一つは、研究者を取り巻く厳しい研究環境の問題（第一〇六号特集「文系廃止？――文科相通知騒動と国立大学改革のその後」、第一一〇号特集「役に立つ学問？」、第一一四号特集「大学院生は困っている！」）であり、もう一つは、出版を取り巻く外部環境の変化もなんのその、面白い本造りをしようとポジティブに編集に励んでいる編集者の話（第一〇〇号特集「言葉をつくる――編集・企画立案の考え方」、第一〇四号特集「地方で出版社をするということ」、第一一二号特集「一冊入魂！――編集の愉楽」）です。

なぜこの二つの事柄に執着したのか。前者については、編集者として日々、研究者の方々と接するなかで、彼らがじっくり腰を据えて研究に打ち込む余裕を失いつつあるように感じ、それがひいては、日本の知的生産活動の衰退を意味するように考えたのでしょう。後者については、出版市場の衰退を憂う前に、「一冊入魂！」の姿勢で、ただひたすらに面白い本造りに励むのが編集者の本分と考えたのだと思います。

そうです。編集者は本を造らなければならない。外部環境がいかに変化しようと、与えられた環境のなかで最善を尽くして、永く読み継がれる本を造らなければならない。編集しなければならない。紙の本がなくなろうと（そうは思いませんが）、メディアがいかに変容しようと（電子書籍から電子コンテンツに？）、編集者は、著者と読者のあいだに立って、言葉の生産に介在していきます。出版や編集の本質とは何かをつねに考え、悲観せず、楽観もせず、面白い本造りを目指して、試行錯誤を続けましょう。ありがとうございました。

慶應義塾大学出版会　上村和馬

【50音順】2019年4月1日現在

ダイニック㈱	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル TEL 03-5402-1811
㈱太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821
㈱太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111
㈱竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617
㈱東京弘報社	〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-2-1 TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200
東光整版印刷㈱	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15 TEL 03-3632-0801
東洋美術印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-2 TEL 03-3265-9861
㈱トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288
図書印刷㈱	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700
㈱日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431
㈱日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-5255-2198
日本宣伝販売㈱	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021
萩原印刷㈱	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 TEL 03-3811-4272
㈱博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711
藤原印刷㈱	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191
㈱平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301
㈱堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5 TEL 048-422-0029
㈱毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340
誠製本㈱	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952
㈱遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111
㈱ライトコミュニケーション	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F TEL 03-3251-7571

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

㈱ 朝 日 新 聞 社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749
亜 細 亜 印 刷 ㈱	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858
㈱ ア ベ ル 社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360
尼 崎 印 刷 ㈱	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122
㈱ A L E	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627
王 子 製 紙 ㈱	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281
城 島 印 刷 ㈱	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102
㈱ 紀 伊 國 屋 書 店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 TEL 03-6910-0510
㈱ ク イ ッ ク ス	〒456-0004 愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20 TEL 052-871-9190
㈱ 粂 川 印 刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001
港 北 出 版 印 刷 ㈱	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201
三 松 堂 ㈱	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360
三 美 印 刷 ㈱	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131
三 立 工 芸 ㈱	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171
三 和 印 刷 ㈱	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300
信 濃 印 刷 ㈱	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601
㈱ 渋 谷 文 泉 閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185
㈱ 眞 興 社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181
新 日 本 印 刷 ㈱	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611
㈱ 精 興 社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021
創 栄 図 書 印 刷 ㈱	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288
大 同 印 刷 ㈱	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550

叢書・知を究める 最新刊

政治・経済思想の沿革を辿り、
現在世代と将来世代の利害対立を乗り越える。

小林慶一郎 著

時間の経済学

——自由・正義・歴史の復讐

叢書・知を究める 14

四六判上製カバー316頁　2400円

財政危機や地球温暖化などの脅威に直面する社会を、どうすれば持続可能なかたちで次世代に引き継げるのか。将来世代のために、見返りのない自己犠牲を我々は自発的に選択できるのか。未来の人々の利益を現在の政治や政策に反映させるために必要な「新しい社会契約」とは。現代の政治・経済思想家たちの哲学を辿り、新たな理念を模索する壮大な試み。

《主な目次》

序　世代間問題を考える
第１章　時間と公共性
第２章　正義論をめぐる問題
第３章　市場と全体主義
第４章　自己統治の自由
第５章　仮想将来世代と新しい社会契約
第６章　イノベーションと
　　世代間資産としての正義
第７章　スピンオフ
　　——人工知能と拡張された理性
終　歴史と責任
参考文献
あとがき
人名・事項索引

叢書・知を究める 好評既刊より

18歳からの社会保障読本

小塩隆士著●不安のなかの幸せをさがして

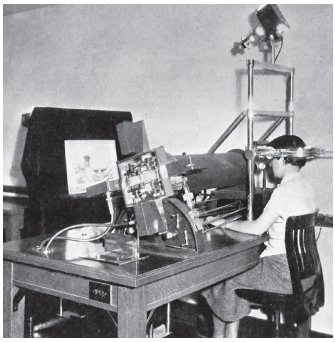
四六判上製カバー280頁◆2刷　2500円

自由の条件

猪木武徳著●スミス・トクヴィル・福澤諭吉の思想的系譜

四六判上製カバー370頁◆2刷　3000円

ミネルヴァ書房　〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町１　☎075-581-0296　宅配可／価格税別
E-mail eigyo@minervashobo.co.jp　URL http://www.minervashobo.co.jp/



表紙写真：読字の眼球運動を補足する
1930年代の実験装置
Buswell, G. T., 1935, *How People Look at Pictures*, University of Chicago Press. (Public Domain)

教育心理学者G・T・バスウェルは、
眼球に当てた光線をフィルムに記録する方式で
非接眼式の眼球運動の計測を初めて実用化した。
バスウェルは黙読と音読で眼球の動きが違うこと
などを明らかにした。

※季刊『大学出版』は、大学出版部協会の
公式HPでも、PDF版を全文無料で
ダウンロードいただけます

大学出版118号（2019年春）
2019年4月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

■ 聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

■ 慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311　FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局
〒120-8551 東京都足立区千住旭町5番
TEL 03-5284-5385　FAX 03-5284-5387

■ 法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部
〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7811　FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

■ 名古屋外国語大学出版会
〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503　FAX 0561-75-1723

■ 三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-5870

■ 広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
広島大学図書館内
TEL 082-424-6226　FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160